

小曾路名所圖會

四

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

7

木曾路名所圖會卷之四

目錄

上諏方神社

御供所

大御手洗

繪馬舎

大黒天

下諏方神社

社

神樂殿

神宮寺

神宮寺

金堂

高嶋城

夜ヶ寄

兼摩堂

諏方温泉

須波乃洲

富士山眺臺

天龍川水源

御射山

保原のまき

和回大山頂

石荒坂

更級

上和田

大門嶺

長窪

海野平

石荒坂

更級

石割坂

蘆田

望月

望月城趾

大伴神社

瓜生坂

姨捨山

望月御牧

角摩川

瓜生坂

瓜生坂

瓜生坂

城光院

八幡宮

筑摩川

川中島古戦場

瓜生坂

瓜生坂

八幡

八幡宮

石馬圖

石馬圖

相生松

相生松

八幡

八幡宮

石馬圖

石馬圖

相生松

相生松

○岩村田

○進分

○諏方祠

○寛石

○熊野権現

○横川開隘

○松井田

○天馬宮

○繪馬舎

○飯綱宮

○御湯金

○辨財天

○瘡癩神

○琵琶窪

○貫前神社

○住吉祠

○北陸道別路

○蓼科神社

○輕井澤

○信濃上野塚

○百合若足跟石

○八幡宮

○大社

○護摩堂

○中音堂

○隨身門

○石階堂

○原一村

○八幡宮

○かぶが原

○浅間嶽

○寄掛

○碓日嶺

○刃石坂

○日射拔岩

○妙義山

○本社

○御香社

○御喜天

○石階天

○安中

○若宮八幡

○小田井

○浅間山記

○塩沢

○坂本

○園山坂

○神樂社

○波古社

○神樂殿

○辨財天

○飯綱宮

○石階

○鳥居

○板鼻

○高崎

○佐登長者社

○金嶺社

○岡部忠澄趾

○熊谷

○久下

○鳩巢

○氷川神社

○調神社

○後吉稻荷

○王子社

○神明社

○佐登舟橋

○会加野

○上登武蔵塚

○普濟寺

○熊谷寺

○吹上

○桶川

○大宮原

○焼茶坂

○縁切坂

○稻荷社

○田畑八幡

○定家卿宮

○辛庄

○深谷

○箕田八幡宮

○上尾

○針替村

○蕨

○板橋

○飛鳥山

○根津社

○佐北順世蹟

○新阿

○岡部原

○觀音堂

○熊谷重實古城

○大宮

○浦和

○戸田川

○平塚祠

○富士権現

○湯嶋天神社

○神明社

妻急稻荷
聖堂

日本橋
神田社

耕頭八穀

倒吉社

人丸社

本曾路名所圖會卷之四目錄終

本卷四目ノ二

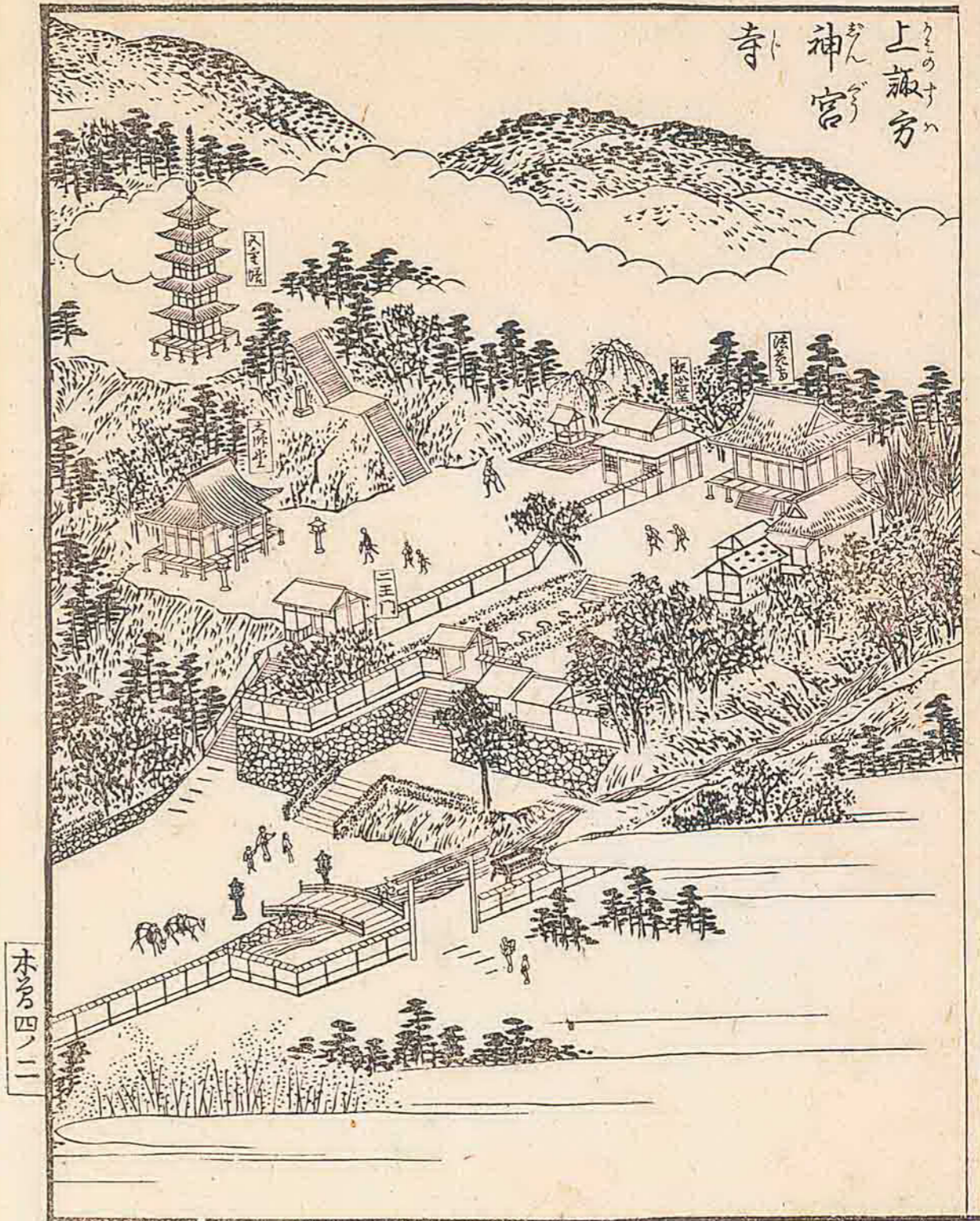
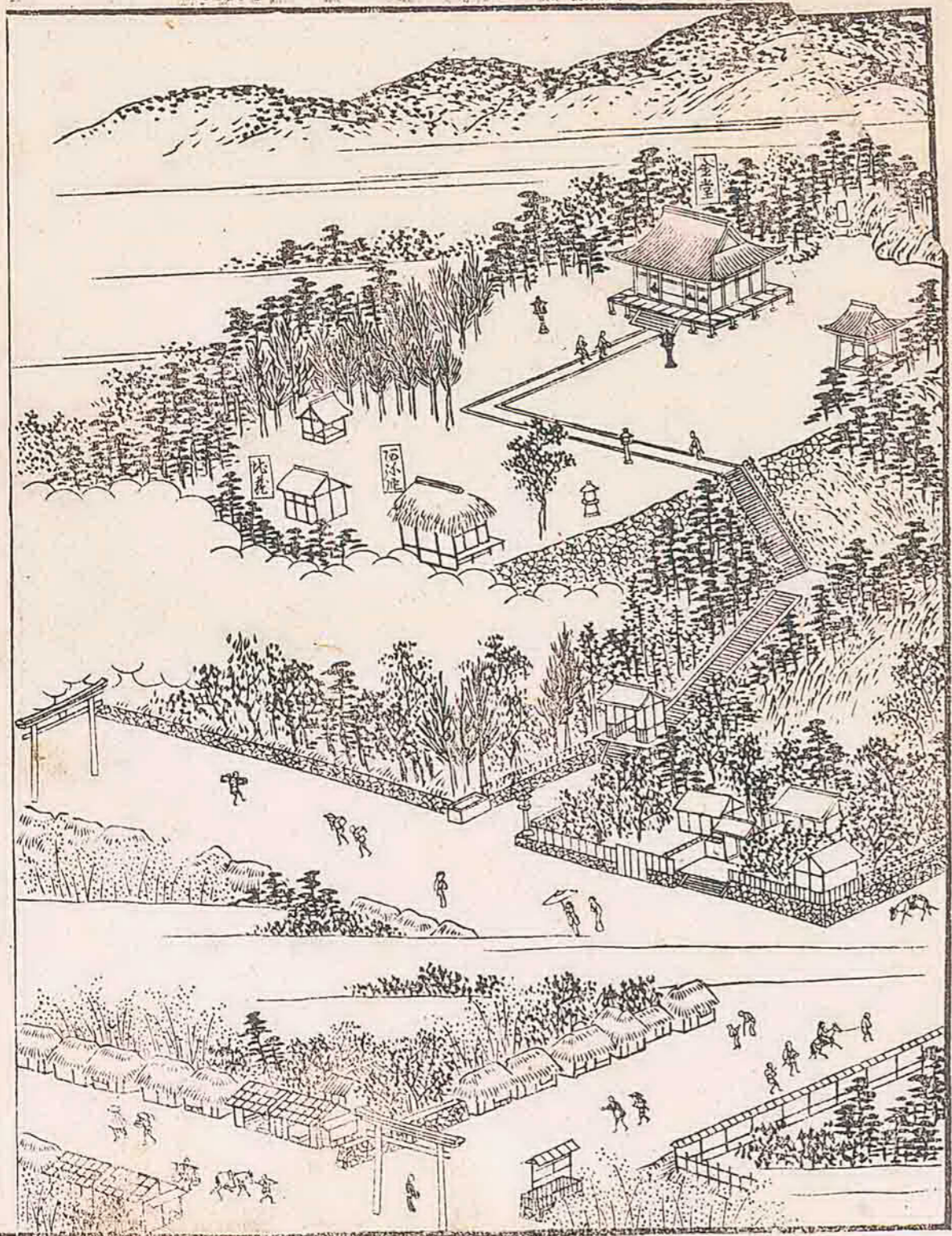
上飯方
富士山遠景

妻はしけ
その

富士
山遠景

代明





上蔵方
神宮
寺

本方四ノ二

木曾路名所圖會卷之四

上諏方神社 下後方より三里あり延喜式名神大月次二座

新葉 あたるはる瀬波の系乃みるを志を育む神のちひる 宗良親王

祭神 健御名方命

續日本紀

美和九年四月授无位勳八等南方刀美命神
從五位下同十月授无位健御名方富命前八

文德實錄

坂刀賣神從五位下
嘉祥三年十月授兩神並從五位上仁壽元十
月進兩大神階加從三位同八月兩大神祝預

三代實錄

貞觀元年正月授正三位勳八等建御名方富
命神從二位從三位八坂刀賣命神正三位同
二月授兩大神正二位從二位同七年七月當

郡水田三段為南方刀美神社田同九年三月

進兩神階加從一位正二位云云

拜殿 南向美藤神所麻のめぐり階あり

御供所 秘殿の東

文庫 同所小

新禱所 同所の北

繪馬殿 秘殿の西

護摩堂 秘馬殿の西

三十九間廊下三十九所の末社あり 所政大明神

前宮社 砥並社 若御子社 拍手社

楠井社 大歳社 荒玉社 千野河社

溝上社 瀨大社 玉尾社 穗謨社

藤島社 内御玉社 鷄冠社 酢藏社

習焼社	御座石	御飯穀	相幸社
若宮社	大西御庵	山御庵	御佐久田
闕庵	八劔社	小坂禰守	鷺宮明神
萩宮明神	達屋明神	酒室明神	下馬明神
御室明神	御賀摩明神	砥並山神	義倉會美酒
神殿中部屋	長廊社	以上一棟廊下之側に禰座は	
大福殿	廊下の入口		
御柱	廊下の内		
大黒天社	本社の外より		
勅使殿	其外未社二番		
六角井	社内東方		
神樂殿	日東の方		
御手洗井	六角井より		

金堂 神宮の西の山の上あり
五重塔 金堂の傍あり
鐘堂 塔の傍あり
釋迦堂 石殿の下
大昨堂 釈迦堂の西あり
神宮寺 真言宗
尚社と科井の園一の宮 ありて特小上誦方と神領度くして
社美藤 ありて例祭と年中七十五夜あり其中小毎茶三月四日
 三ッあり六中と用也二ッあり初を用也麻の頭と七十五組の世神茶
 小供と又別麻の肉が料理してその社人も其麻の肉と食は他人
 麻肉并小獸と喰んとする所と神小形して社人より箸をきて喰は
 據形とせしめ上下七奉に一度申奉御極とて其
 あり遠近四方より諸人多く集ると其祭式者多しなり爰も古来

諏方湖

下諏方

神宮寺

高海城

諏方の湖

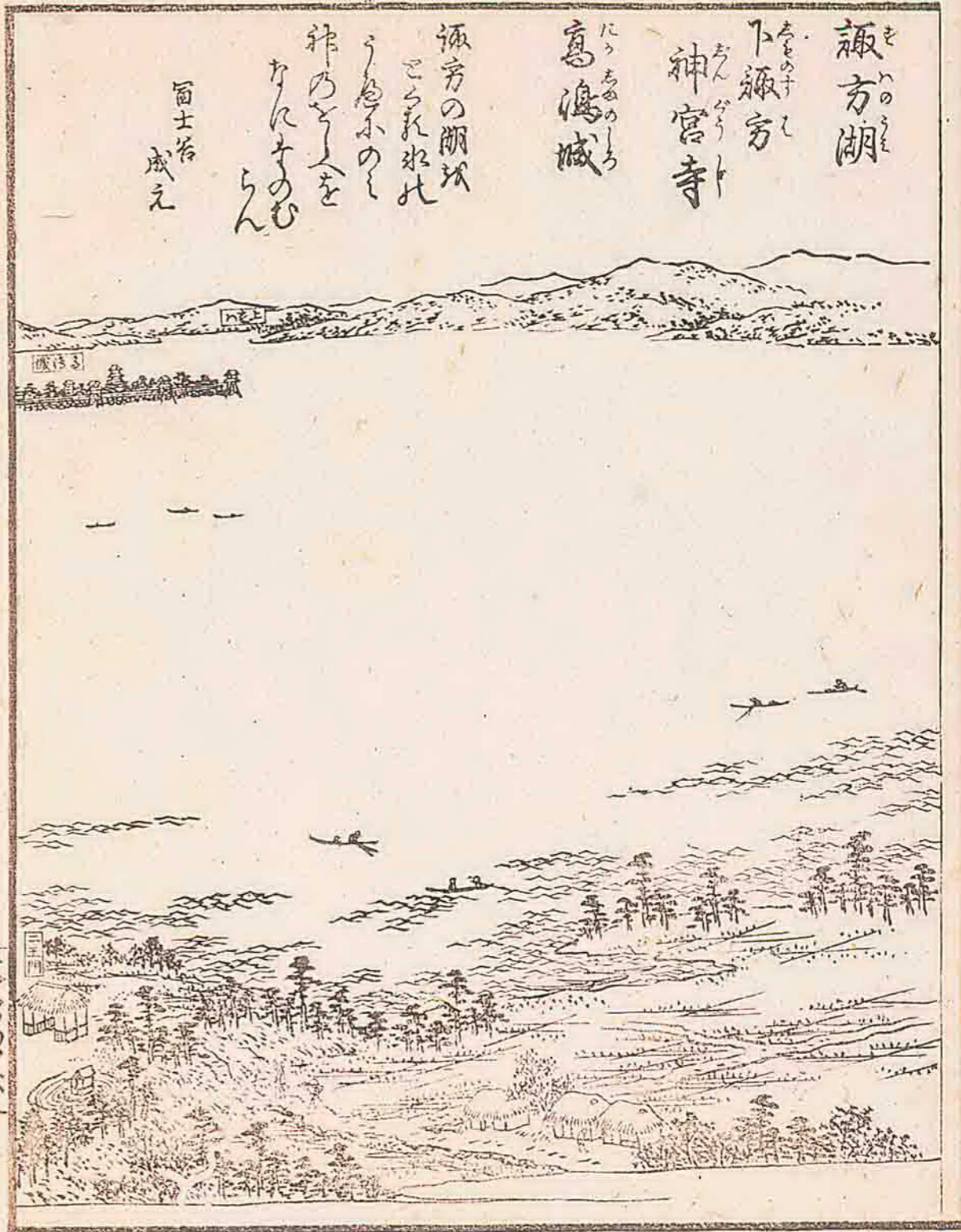
こられ水

うき水

非乃と人を

かたすのむらん

富士岩 威え



本巻の四六

とらの海や

水乃知りに

新りくま

空井小

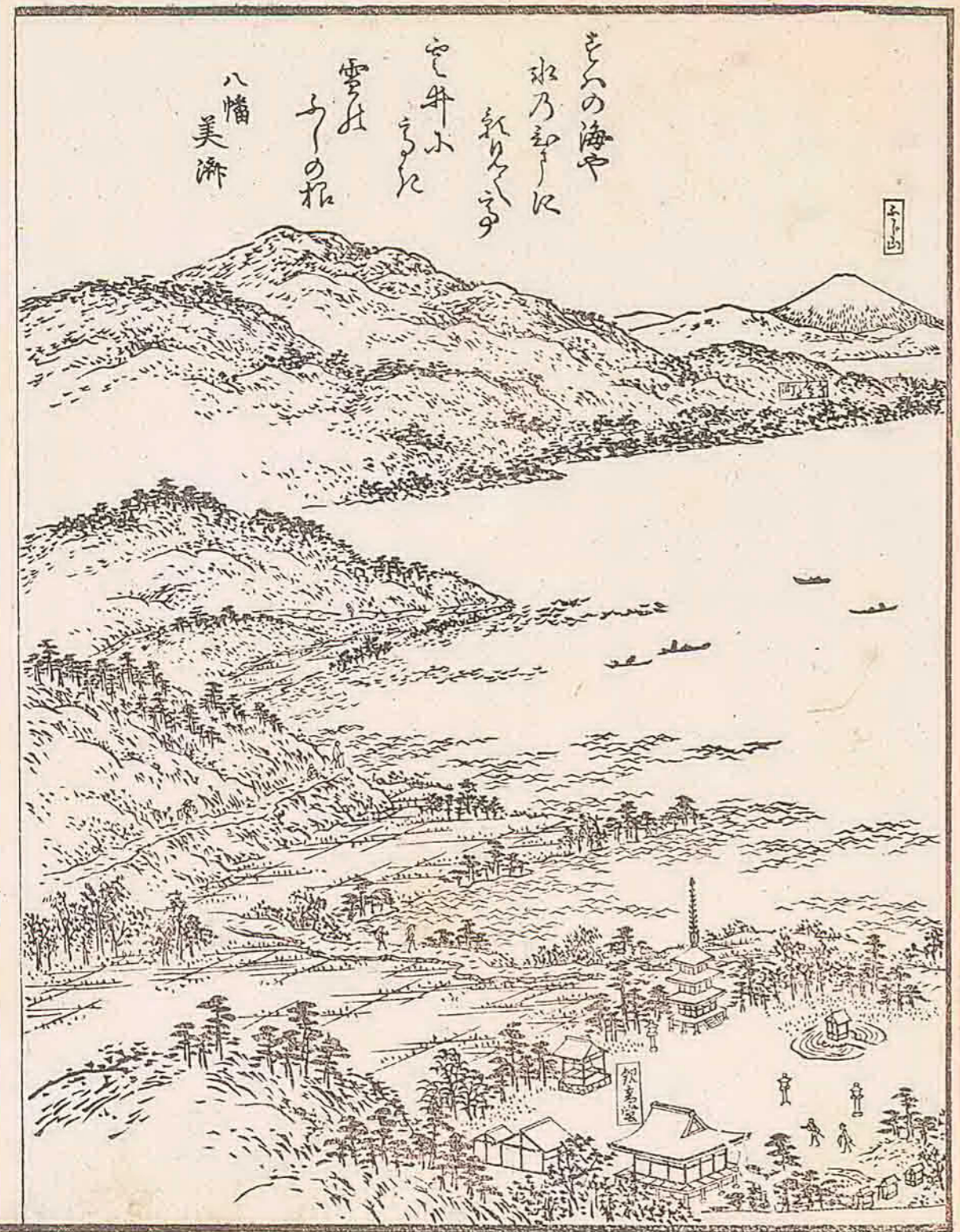
うらた

雲お

うの松

八幡 美濟

ふら山



又云 信濃諏方下野宇都宮專狩獵供鳥獸

名も一抄下の諏方の此街道の駅也て旅舎多く紅華池
耕するうろた女たちほひとあらんせくや神ひを紋取りて
撮りけく乃是とて心所の中に温泉ありてけ宿の女ありて
浴衣の白紙飛した浴させる其介と浴づの者多く旅中此旅舎
須波乃湖 周十一里餘三三里餘細細龜甲あり今も水溜りて
いあよ及ぶるその旅玄々の以湖面風のらひてより氷積らん

おご

極川院後百首

壬二集

拾玉

山家集

交本

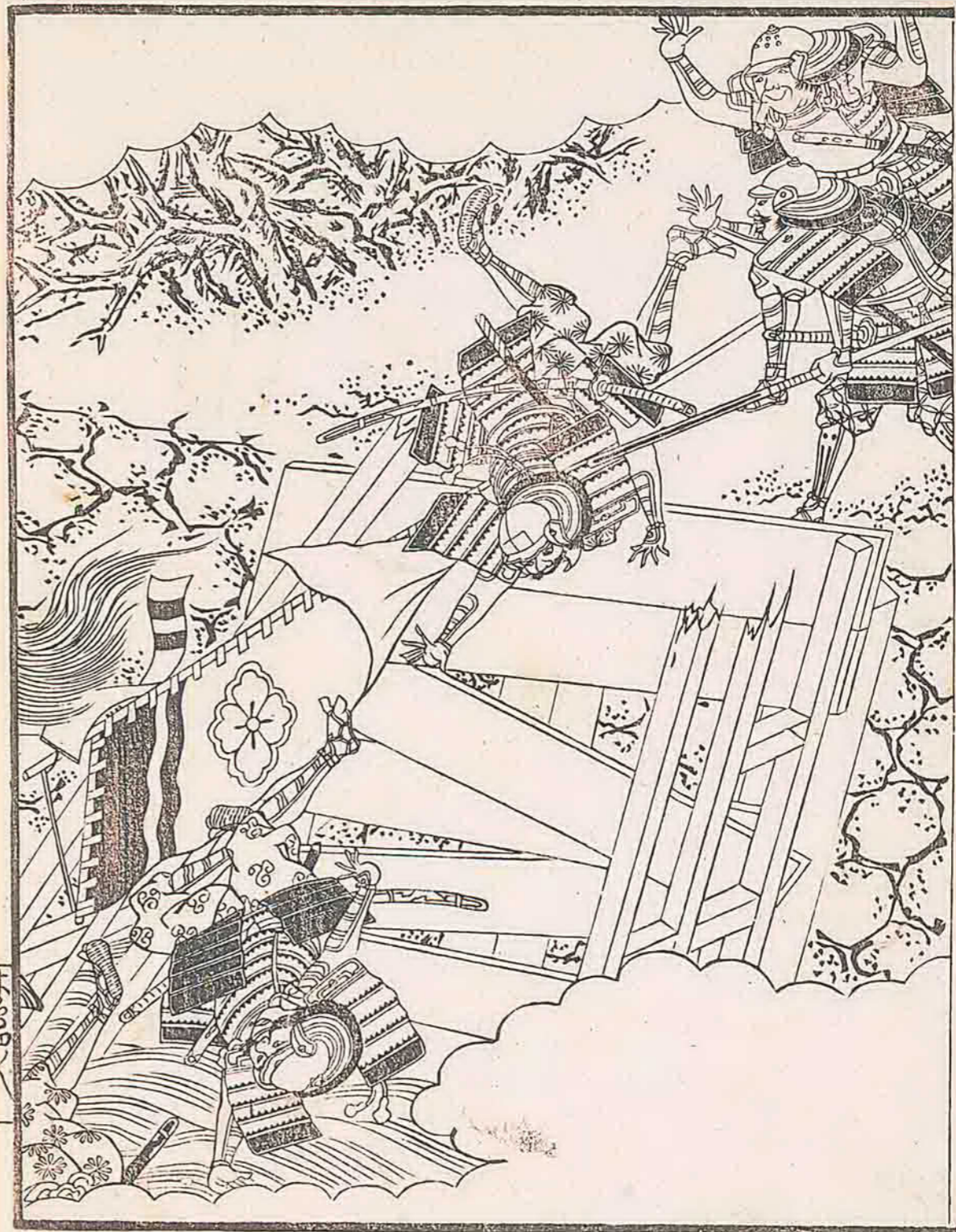
まの湖氷れ指もまの結乃渡りてさる打るなり 秋仲
そまの氷のうも氷舞のすれ海もあまはまはま 象陸
旅方れをまをくつる嵐波を氷にけははあり 菟結
まの湖氷れ指もまの結乃渡りてさる打るなり 西リ
まの湖氷れ指もまの結乃渡りてさる打るなり 為家

本巻四十七

日

まの湖氷れ指もまの結乃渡りてさる打るなり 親陸

け湖まのうもて海れとそ七尋むり所を先づり小浦くありて
氏家衆一四方ありてありて風色斜るん漁父ありて有
て魚鱗氷される半ま一漁舟乃外舳小葉とて林をたの
湖氷のひりりまよつてあり氷をるまの尺寸を透間なく湖一面本
ぬらり半此寒温ふよとて雲月のうらありひを作きれ初より
氷をるそ後人まよを通れまを半はるそ二月の末二月半
中氷のうをゆきん氷の厚さ半あり八九寸一尺或守あり其
上氷何程乃大本大石をまもも破る半形一幾千人つりて毛毫
くべ氷のうもまよぬま橋をたて通る其まよ雪橋まよ雪か
めくづんまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
日本國中に湖ありてまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
日本もく地高くしてまよまよまよまよまよまよまよまよまよ



武田勝頼ハ
 我勇威を
 自負一々
 神佛とぞ敬
 せ代る遠
 赴き冷ひ一
 多ら板橋崩
 危れ幸多
 赤穂浪方の神乃
 許トワ
 許トワ



水の下に網を引を引引中より種又奇異の業有り水底を所長く
らめて其所より網を入す其先成らば行乃草を持て其先成ら
ず亦不より次の方らむらたる所中もあみを送る爲て其所もわく乃
おとくもらむらて網を引引くもて魚を獲むらむらむらむらむら
ざる事を知りて其先成らば行乃草を持て其先成らば行乃草を持
漁を爲る所も長年所接むる事ありて其先成らば行乃草を持て其先
死とせぬもやせりり或は沈没の人ありて其先成らば行乃草を持て其先
り小鷲なくもらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

高嶋城 下の所方よりき里小あり 諏訪周傍の守及居城く三万石味
縄糸又所方より有左右とに所方より有左右とに所方より有左右とに
出入自由方を以味と山幸島助晴幸繩張とより
衣裳濟 富士山の朝うける所と
丈夫 須波のうみこ舟をがみさるるあはれと有りしお母のはの
すの海衣が借本とて見れぬ富士のうみこ舟は乃ほつと

大納言氏

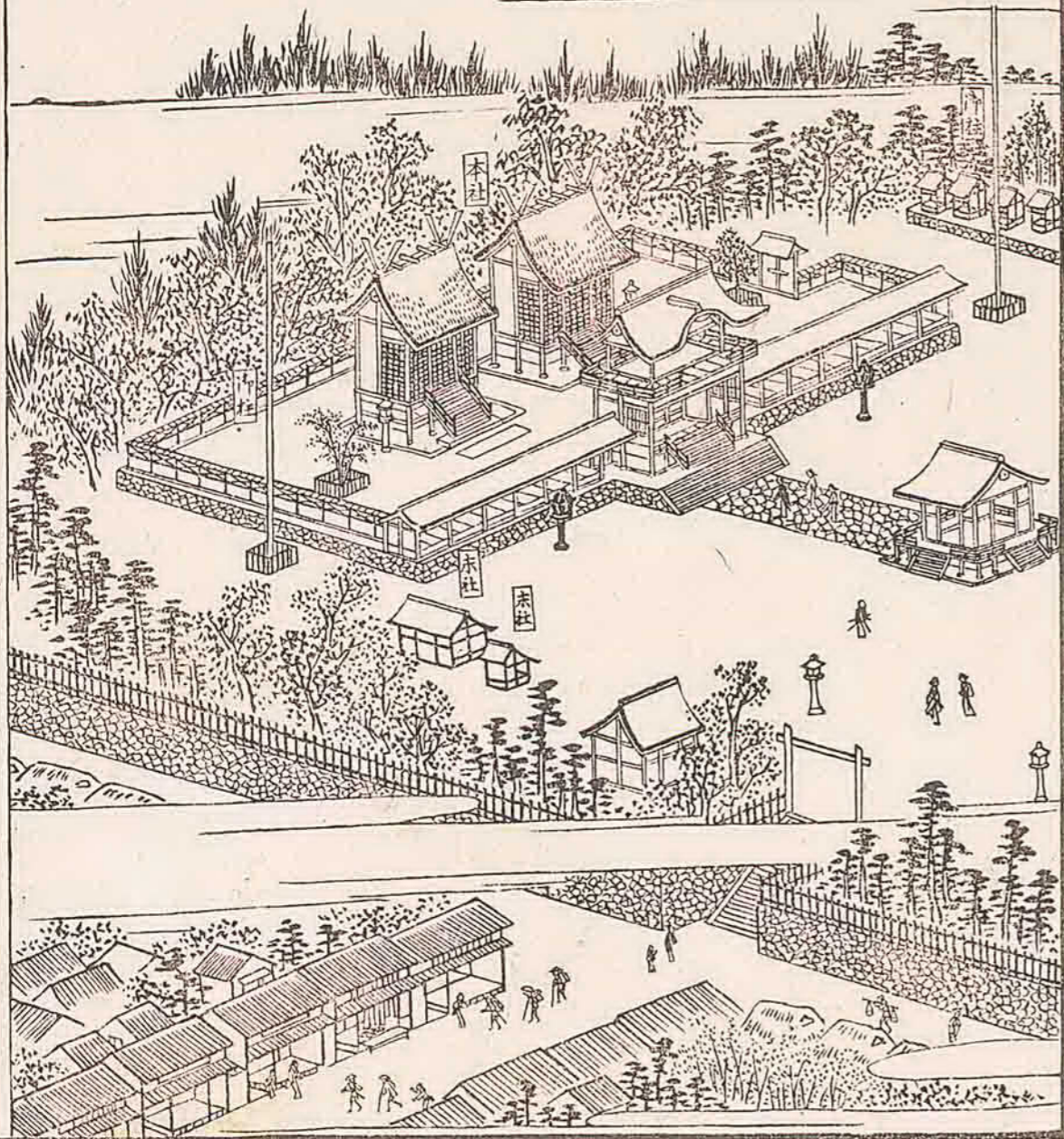
諏訪温泉 外海方 諏訪の湯あり 権人及び新中の人と平生
を別川 別川の権人 別川の権人 別川の権人 別川の権人 別川の権人
富士山眺を 下海方の湖 色あり 上海方の湖 色あり
雲北富士 水中心 雲北富士 水中心 雲北富士 水中心 雲北富士 水中心

天龍川水源 其の湖の傍に天龍川あり 上の海方の湖の傍に天龍川あり
が中より其西の山を守りて 湖北良山あり 湖北良山あり 湖北良山あり

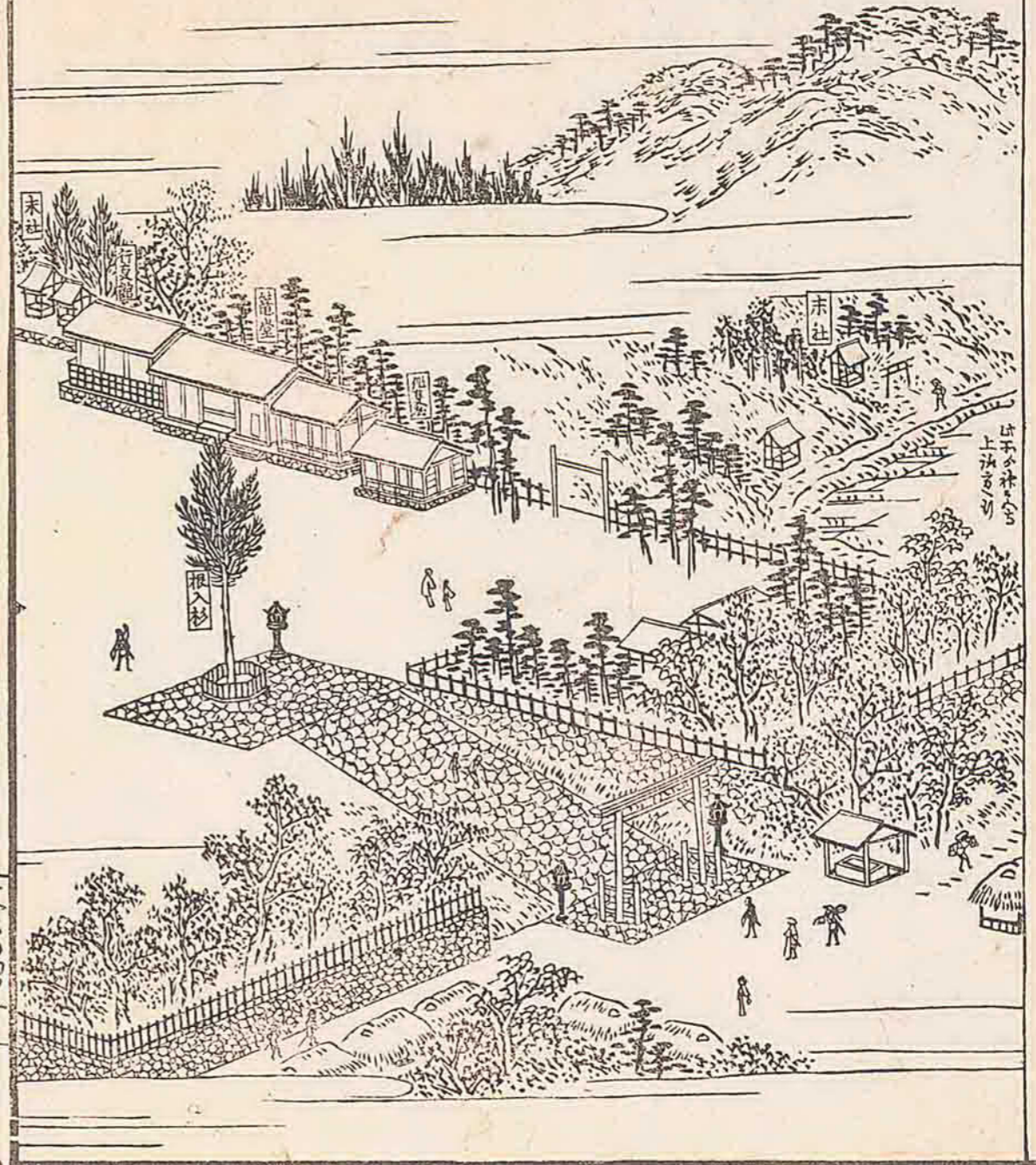
御射山 止海方北の山と云ふ 射と矢の標語なり
玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉 玉葉

と云はれし種をたぬるの二ひふさり一里ありの山 金刺盛久

類題
 宮程
 幾つこい
 ちん
 君く代々
 うこう也
 天乃下津
 岩杉小
 道遠院



下諏方
 秋宮
 上社
 下社



毎やう一二月廿六日沖射山狩ふらで申して日廿九日幸の秋小
つを狩ふ長官五領家等のつりを成候はうとてたをそとて暮
つりて神瓜積登乃神幸とて

保彦はまゝとて 諏訪郡沖射山神戸の東八ヶ嶽の麓を抜登野
生凡所を 又筑摩郡本所の山に為水の神を
保彦野を

社中抄 志未成なるはれはまゝも風俗をそとてはそとてありしれ
顯昭云はのつりつ所志の國小育其節よありしれ
今小縣郡保彦の地名ゆめ

文永二年九月十二日夜野鹿を

後古今 志未成なるはれはまゝも風俗をそとてはそとてありしれ 岡白太臣

去雨抄 志未成なるはれはまゝも風俗をそとてはそとてありしれ 後人云

鎌倉名鷹狩ふより 雁方の沖津に志未成の鷹狩に備てありしれ

東鑑 建曆二年八月記云可禁斷鷹狩但於諏方

大明神御贄鷹者被免之云

本巻四十一

信太社百者 信法あるはの層をうらむひき津結を世とてはそとてありしれ 宗良親王

風祝部

袋料子 志未成なるはれはまゝも風俗をそとてはそとてありしれ 保彦親

日料子 信法あるはの層をうらむひき津結を世とてはそとてありしれ

信法あるはの層をうらむひき津結を世とてはそとてありしれ

信法あるはの層をうらむひき津結を世とてはそとてありしれ

信法あるはの層をうらむひき津結を世とてはそとてありしれ

勝頼 諏方泰詣應好藤 去程小法性院之僧正信玄去信天正元年四月十二日逝去ゆ

三年の間に流く此事松陰密して今年天正二年四月十二日七佛

事と執りまはるあつりつては方の敵國を志未成は信(心)とて

敵と云ふ者多るをわ別して織田演松の真家合符あり勝頼

敵と云ふ者多るをわ別して織田演松の真家合符あり勝頼

と攻滅する企圖密かに武田の臣勝頼を誅め常に其備の怠り
城を責むる事あり武田の幕下三河山家三方の内能子の城
主奥平兵衛守貞能其子九郎信昌去月八月より遠河原松平
源光とて月長篠城小指籠る勝頼は幸城を小怒り給ひ志こ
出馬ありて長篠城と攻め給へり天正三年五月中旬甲辰
の辰と出馬せし我お從之て武田道遠軒信連穴山左衛門右衛
入道梅雪一條右衛門左文信龍武田左馬助信豊武田兵庫助信重
真田源左衛門尉信綱を始とて都合其勢一帯を解人をして圍之
使川諏方大明神小幸清ありと種より進小進後を待てしとく
かの社小馬坊向種なる既小幸清の弟松平小指佐玄よりお侍
不龜甲の持陰梅極書の下より折るべきを不測され其より遠
へ急給ひる附板橋馬場より涉渡りありしを堅固なる
橋ありし中程より遠小幸清て舎人をけり小人衆三人を死せしめ

津馬逸物とて小勝頼馬上の遠者めて申しをば強とて駭然と
すより津身小恙もせしむるふより今度の合戦いふあり
難人どもに松徳なるを理とて見ゆるなり
和国大嶺 下の諏方松三と都合橋ありし両谷とも諏方山とて小和国
義盛の城ありて徳村立場所て是より廿四所ありて急候屋敷に種より
又廿一町と種て和国津中より分岐の峯より空快船なる附る富士山麓
見ゆる西板橋一東板橋とて三月の末まで雪ありて多し地は甚だ
多し所之嶺より分岐に東板橋村ありて村中三場の粟屋ありしを
上和国とて西六町之けし山中に名草多し西側九輪草下毛は虎尾草
釣鐘草は湯花などありしに茶花見ゆるなり

旁より蹄馬をちりて和国津

骨

上信濃

長久保中や武里之驛の望に八幡の角一海あり和国義盛の
雲狐ありしより石の出けよおひ川橋あり和国が系とすはた

長嶺の南小之門虎之門村あり街道より遙かあり下河田を立陽
にせし密屋あり深き山村青原を以て小孫形なり後河川不丈橋小
橋十間許あり南は溪と河田とを流るる東は之門嶺より流るる
之門嶺又之門村の南ありむら武田伝云々伝列後河
之門嶺合戦

小笠原長村村上義清両家の軍勢一萬二千餘人之門嶺へ押寄せ
武田家の軍勢も亦一萬餘人維せし其時晴信小笠原内膳正秋山
十年を流るる人をもつて物見御付にれ義二入打はまき張りし
折る端よりゆけし小笠原村上西進候もの之杖あり其勢一萬餘と相
見く然も後小備一萬餘を軍とせし懸り惟も我より信
左ありは信方の備を待せしと八ヶ嶽の麓甲列通棍が原に陣を揃し
流勢の足程隊將様河備中守日子息は十年甘利が多人加川より
先小備は二の身は甘利よりあり日多河原信子新能よりあり
板垣小加の二の備の先より日安河三衛尉の飯島孫五郎加川より

二の先より小備を虎昌後と立堅む本陣の左備と士大将加賀守昌後
右備と原英流守虎胤小懐小懐守虎盛左陣は市川赤女正子二五郎
原と左河内守と右河内守後備と武者奉加藤駿河守昌頼多河内守
在河内市川入道梅印あり物見處本信及勢之門嶺打越し村上家の
先手布下平治入道知十軒其外宗徒の者せしはも奇心の列と云
懸合の次と相計り知十軒の備は進先横河備中守が先手小押
の教西陣関を令く砲弓此迫合と始り孫の穂先を拵へく互に場を
替り争ひたる平治入道は之別者打をられ自ら退き退きて士率と下
知し直先小突ては甲列勢平治入道が働小うけられ一所併引
退くこ種を安らげ思ひて二の身は甘利押かつて勝負を以て信列
勢と備より之を後小知十軒戦中けし作の旁へ引致を武所退き
備は乱れ引退く次小笠原長時の子孫勝山多田流治守也
かけ合をく入札は致ひしが小笠原勢一隊は致ひしけ大勢討ま



温泉
飯場

拵棟屋

中湯
下湯



氷室
あつた
のり
のり
のり
のり

籠屋

向屋

信別一万の先鋒兩度共ふら負一は之將義清之弟也我旗幸
とて之を誘取を一戦申交せん也其の心は押本不安心が勢信
兩旁互小陰入とて必死と戦つて信別勢の多勢とて大將義清
一戦申交と突敵とて其の心は進む所安間が勢敵のまけく
四度路の形をくす所引退く二の身も備へ飯家兵士率以
勇て村上勢も突のれ大將小笠原右馬助長時本牌を取て其
が勢も馳合を退く内敵つて其時旗本の希も備へ原加賀
昌後權孫小突合んや妻子の方へ備を押しつれ大將晴信自
来牌を多く旗本とてつたの方へ押入へ原加賀守が備と左右
より敵隊中にて様孫本とて突入く巴の字も兵の井の字も敵隊
突敵分りしもの信別勢晴信昌後兩備の様孫小敵走して其の
形をく散れ先きの二備をれして退きを限り小印と揚げ其首を
斬るに恨面一千七百廿二級あり味方合戦後兵者疵を帯びる者

本巻四十六

信濃 長瀨

信濃 石荒坂

信濃 蘆田

新兵合々く二百は核三人たり也又旗本を考られたる軍記あり

蘆田まで一里半は驛の民居三三町ありを有お對しと巷と

おん其餘わづり小散在り

石荒坂は所より若老まで十五里
上の後方へ七里は間坂道あり
石刻坂は坂より遙く妙義山あり

甚き傷が居る所あり

海野平合戦

十月十九日海野平に戦ふなりとて則ちの地中押出する晴信は
晴幸小幡虎盛原虎胤は二人を召れ果荒若之將とても項羽
状も欺く勇將とてを義清頼も今日合戦と必死十九
生くるなりとて其の軍は軍之海野平に物見より見候あり
中宮より之則ち向ひて敵の橋を下雲一龍御て山幸助助が申

多るの故の備速なる申小濁子と申すの如く合戦を持て持た始と
 尚家との取合形は甚備の他法最守とてせやる原小懐がや乃の
 款成程合戦を持て備蓄と相見に人殺と六千の内弁とせやる
 斯く二人又誰とせも若きれ沙汰をせりや申以時信汝等二人の
 外まに何とせ候べきとて山幸と追討られ備の高儀ある時幸味方
 備の立極を悉く演台とて宗虎の少勇將ゆとせし味方の一万五千
 餘騎今日午刻まで兎角して時刻を極し僅に味方の吉村小次郎
 若丸別荘の大將出陣勇勝とせや候せりて殺せざるは樹と形は
 敵と味方は弱く味方の利と候惟中やせば汝が中は一こ程不
 中なる所あり候を立候とて陣を替異本定らる河川先を走
 右の方へ小山田備中守信別先方の相本市産湯尉守月甚八芦田
 下井吉友壯平尾老尾耳取依路平原左と郡内の小山田左衛尉
 信員先方共長座左衛尉小若甚八松尾五郎左衛尉和田福次郎



大門邑
 若宮八幡

村あり中北先より桑原左衛尉昌信良先方より須田隆房も室
賀綿内井上より旗本の兼備と真田弾正忠幸隆九子屋沢より
旗本と一より旗本の右左方五町許隔り飯坂兵部少輔虎昌是
も豫久小備より旗本は後備馬場民部少輔宗政内蔵修徳昌豊
日向之和昌時勝沼入道定山伊豆守信良武田典厩信繁此六頭
旗本の辛陣の後より弓子の方へ盾り小備より原加賀昌俊も
九十騎と従て引下りて跡備兼せりる越後勢と龍の九備も立
て桑原自身旗本はとて信信の旗本に合せんとせ旗せりる
物りともども飯坂虎昌馬上歩武者凡そ一千五百人桑原の奇術
松原とて旗本の右小備を立堅先例の赤備兼て馬具旗指兼先
渡りてはれはとてを猛勇の桑原宗虎案より相違の言をかり取て十九日
の午刻小山田備中守越後勢の先陣長尾正系が手申互小寄合と
て所やうらちちん小陰と提々突々入るる旗先登せ
旗指を歩遠る程在りありとて小陰と提々突々入るる旗先登せ

攻戦小越後勢旗の引け二町許旗引引小車山城守持旗松原
守安田上総介甲州の左子小山田左衛尉と旗引一が小山田既も旗
負て武所許引退く是を見と桑原左衛尉信繁と旗引
合て急の老鼓を打て甘糟辺の備中実々かか付め桑原の旗
幸より揚貝吹立とて大将桑原自身守佐神後河吉良勝次連て
只武騎先より馳り来牌をひきと旗引勢と引あせり武田方めら
我も小山田助助大將の旗本よ本を敵と魚鱗は備く其二の一旗と
相見之作とも味方の陣は堅固ありて旗本とす小虚うらちちん
虎旗ひと旗引して引たやうらちちんとて士卒長進はさる中より
御下知法む本作中はねを信信即百足の指物十やんをひき小山田
桑原が備中獨をせられり追敵と旗引と進ひ作ものつたの小越後
再引る所はなれは制はより岡場より追敵を然るべしとて旗引
ら我はるよよとて信繁付桑原旗引とて軍旗は先なる今日午刻

より米の半中での合戦も歌詠討事式百六拾之傳書に討死百廿
 人其日の申辨し及んぞ首世思皇勝岡を揚之 委之山本密謀軍記
 にあり録く二百人
 更級 藤原より七里あり郡の名あり
 姨捨山 更級郡あり 姨捨石也 六和物語云

志あねれ國はしし船といふ新由男住らありあれた財由親も死せられた。
 姨形も親も如くにづくよりあひそめくめさふじ妻れあはれいせ
 つらね事ありてげたてめれ老を仰りあはれははにみら
 川へ男もあはれ姨れもあはれのはづる流あり死事といひて歩
 づまばむいづこいづこあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 此よりあはれあはれいづこいづこ
 頭取袖中抄云
 此頃母の中らに命あひそめたる姨を妻乃のよみはせりて
 甥の母もは月あはれまゐるおあはれ登りて更級山に捨り
 けるよ東姨捨山といふ

後頼毎名抄云

吉今 後拾遺 新勅 新後撰 續十 續古 後拾

わうくわのそふりては頃中らひけるが母の姨也一老く
 むうくわりけきいりて事あはれ月れ隈ありけりふけ母を
 すうのがせそ迎へ歸ふら東峰のひの山乃頂よりあてよのす
 月城見く縁けるあはれ其あはれを姨捨山といふ
 我あはれあはれあはれいづこいづこ
 月ひあはれあはれいづこいづこ
 これあはれ月もあはれ思ひの中ら姨捨山乃ゆりて公事
 さし形も姨捨山の名程もあはれといひける物も月乳
 子親あはれもあはれいづこいづこ
 月これの夜もあはれ一更級も姨捨山といひこれあはれいづこ歩
 今更あはれいづこ川の流もあはれいづこいづこ物もあはれいづこ
 けし形もあはれいづこ里もあはれいづこいづこあはれいづこ
 さあはれいづこいづこいづこいづこいづこいづこいづこいづこいづこ
 日

後人あはれ
 紀貫之
 橘為仲
 家隆
 宜秋門虎
 丹波
 藤倉右大臣
 後人あはれ
 順徳院

後掟
後拾遺
河死
千載
新古今
類題
六帖

かつこむをそとて結と婁控のひより山月をりかた
源重光

おとくも婁控山の月と身と成よをけしおとくあつと
赤保傳門

思ひても形くても我身あかす婁控山の月とるをせは
律昨無委

いこも月わつとつるまをけつてんうまの心
隆源法師

けつまも婁控山有船のほたきをもの成るひらふ
侍勢

てる月とるく成るそとて文級や書ねの寺と好芳は
後拍原院

婁控の月成をせつてみと何あつて君あつておとく
漢人志は

母のけや婁ひよりなり月乃友
たせ瓜

名の月や田毎乃玉中の風流
藤島

眼をそらちとくそとて源一や夏の月
菖骨

そ徳を更級婁控山と書田の跡より七甲ふあり其所は武水別神
社あり式内大 今八幡村ふ所の社領式百石又冠嶽の麓にたつる
巖石ありそ徳を婁石とるふ 横十間坊 けりやつて菴とる満月

本巻四ノ二十

殿とふ二間庫裏半 巳午に向ふ幸尊とて親善院院長樂寺や

号は面と棚田の上小隱と神田に十八畝とて兼く神供をまを中好

掟と前く水成中とて田毎月のはるやのひあつてそつと山と東西小横

とれ西水にせく千隈河巳午とあつて良小海の月満く浪地中

踊ふ小洲とて左共八岐の社あり川と通く向ふは屋とてこの地あり武

水別の神踏とてやあべ一の唐とて宮寺の子院とて系統の宮を

せけつとて人里遠くとてあつて源一好乃とて徳と月とて志ねを

今より百年とてふあひつられ雲水清けあはる湯とていそつと

屋あつてけ池とて月のをより雪とて度成とてつられ婁控山の

入相の清とてまぼく物あり中とてむを白波緑林のたごひ松葉を

あつとての頭陀とて徳院の幸とて我ははく一あつて冠山はあつとて更
級門田毎の月婁石甚侍小桂樹姪石小袋石室が池とてに鏡屋山
有明山小とて一帯山南とて雲井橋あつとて十二重塔のひあつとて

あれ寺小はし影の月を雲さる縁起あり夫は地神二代の昔は清后
本花用姫と申其清父と云ふ天の御命にては結姫成天の姫中よりあつた
醜くはるをせむくして他の上は幸成結つては結成とては結成の四子を
色をせむすでも注むくふをのへはあり物の命にけは結成の注むくや
打と申合縁起の清出は結成り申は結成人志く注成すより今
清く結成を母結成を結成の結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
雲さるに結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
水の國は清くは結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
打り結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
うの結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
て清く結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り

清く結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
炭小結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
の結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
と結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
あつた結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
見く結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
は結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
つり結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
忽ち結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
に結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
す結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り
冷あつた結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成りて結成り

望月 (信濃)

八幡中にて二指或所、あねより吾光寺二十五里
 越後高田く約指八里

望月城址 尚宿の末れ山上あり
 大伴神社 今津 神社と社名はけし生去社
 望月山城光院 日談あり
 奉尊阿弥陀三尊佛 盛敷庵主 文明二年辛卯十月十七日逝去

望月石 門内 堯石あり
 望月御牧 今牧乃系といふ

望月御牧 今牧乃系といふ

拾遺

逢坂の關に清水を流して、や幸らんと存る馬 紀之之

後拾

あま板板のむらまき引程の押あられのあねりらほたの馬 良選法師

金糸

東海に舟を乗る望月の駒ありといふ 源仲正

新古

さくら山代古道約とめて又流りけふも望月の駒 定家

新千

むらさきもあつとぬく望月や面けりらたを月此駒 花山院

後拾

年次及く雲の上車と見し林の影をさひき望月の駒 後法藏院 津製

拾遺

望月の駒より遠く出ほまゐりてく望月の駒あり 素性法師

後拾遺

望月の駒のくまを望月の駒の本れ下をさきとて有 惠慶法師

望月の駒のくまを望月の駒の本れ下をさきとて有 信濃の

望馬を殿覽し、望月の駒を望月の駒の駒とて有 信濃國牧馬元八

月廿九日古物見賣り、今十五日申定む、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり

望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり

望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり

望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり、望月の駒あり

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡 塩原牧 岡屋牧 宮庭牧

殖原牧 筑前郡 大野牧 伊奈郡 平井互牧 筑前郡 笠原牧 伊奈郡

高位牧 高井郡 新沼牧 佐久郡 大室牧 高井郡 猪鹿牧 佐久郡

荻倉牧 佐之郡 塩野牧 日 長倉牧 日 望月牧 日
角摩川 西條井守の川より出る下流を越後へ流るは同月精也
あり月日の盈缺もよくはく二里下りて流るは廣川

瓜生坂 上り坂より下りて金山坂とあり
布引山の道あり

八幡 塩灘中を二十七町新の中に
八幡宮の在りあり

六十六 經塚 新源村ありむろし 鹽屋上人より遊日卒六十六ヶ團
納めしと

筑摩川 大河なり流れ二ツ支流分かく千隈川 或は千曲川まこ
水原と佐之郡金峯山の陰小出りてありはく小筋と浮小筋と

をほくはく河中橋守部の境を流るすは摩川と約が嶽山出く
筑摩安曇更級水月の界外經く筑摩川小筋合流とありはく

とよ子 越後の新澤ありて志家の川ともよ子あり

万葉 信濃宗流知具麻能河伯能左射禮恩母伎彌之

布美氏婆多麻等比呂波牟

風雅 ちくは川事の水をみふさる清ていづは事乃とる香 吹徳院

新後古 君代ちらまの川乃さねらちむとせと成はせと 式子内親王

雪玉 名のうみ降をほりて千隈川は種や寄れ雪小舟と心 道遙院

扶桑略記云 仁和三年七月三十日 信濃國大山類崩山河溢流

六郡城墟拂地漂流 云 倭素飯方流安曇佐久高井

金峯山の山陰山より人を呼んで研おとす 乎半伊 二声三声

ほりてほりてはる本熊ありて迎下るとよ又大人の乳袋は身を
ありて本石小尻をびかどて人を目送り又山焼の履とて長三尺

汗流所曲く本皮とあははるそのなりを固くは種海山の老翁
新ひはく飛騨のやまこころより若大なりとる

川中瀨

山幸勳功記

山幸勳より小十里許あり昔先かた

上杉入道藤信川中瀨に合戦小笠原時成交せんて武田の兵

争ふよりひけ付ざるに勝負とせんやあまの山に

備あれど十分すむがたあまの山に兵隊方の之陣とありて

機勝が備へれ入へ久徳信今の河原見合をとき降受て二

旗平のけし入り毎を一時小笠原とてや後陣の甘糟直

軍の堅固とてや中瀨へみづら旗本備へ小笠原の兵を率

陣をうけ抜接するに馳通て信玄の床机乃備成目け突

四方の軍備とあられし御先陣飯袋が備と其穴に備

信玄の旗平や只三備をうり場とさへてあまの徳信

手は運兵を率へ育をな亡以死んと勇軍日小百倍

入る小旗本の茶備もあるとはれ中瀨に二帝長坂約

之向より防とてども上杉勢勇壯めて多勢なりを幸

山幸勳功記

探立なるも中瀨長坂約の二將其勢力相敵がて突

散れせし程小笠原信玄とて二尺六寸の大さかぬ

床几備も馳かへ信玄登りたるに迎撃等に命じて御

一軍の勇と格つれる武田の兵士あまの山に

程小信玄も今助を考へけし速く小笠原の

去て熱坂軍と成敵年武功も水の泡とて

登り床几の動かして押さるるを徳信とあまの

形なく信玄の床几小笠原兵一付と思われ

中瀨に有る徳信も速く馳せしれがす

其後相を考へて見ざるに駒を馳去る力あり

切先りり小笠原を陣けし切符とて信玄床

刀を抜き信玄のあまの山に將徳信が

ゆへ其流も信玄を流しとて見ゆる

ゆへ其流も信玄を流しとて見ゆる

筑摩川

あぐまに
家おゆり
ふるぬ河
たさく桃ま
うけゆして

三州吉田
義方



後信小助の主人をさうく殺し小道の後小助入る日ト出立の
新武者御ありて声松ヶ付後信面うへを振おろすのたあう
智深の細みゆり入らね道う幸あさうと一匹共のふ小からんより
伝云みゆり其首が初ぶへせおろりやうや後信よてび殺したる
りふおまう実の信まあるやせ終し日ト出立の幸まも殺せん
多ふ其中は信まある人幸必定く思ひまけある三人をけん
と火水よりく物さうり山平助助入道の生も小加う欲の生深と
信深一太将後信小道人と尋求しかども双方乱軍や成り加う
し後小助方の旗本らとせ形しと返り返り處に敵將後信深を
切とめりし床几備を崩し信まみゆりさうりさうり若るその有る
再登山中道鬼さうり大幸ぞせきふ馬小鞭さうり雷電よりの逸
早く飛ぶや否や陰がゆひゆり無二無三も後信月ヶ付突つてふ
其陰先さうりおまうとさうり後信おまうして何やうなる哉歎ひ出

坊とけん事奇傳之申つるは神を我事申中助助勝華入道方也
名宗なる小流伝叔と無双の曲者宗返の老一遠信言申合形が
け傳述人を殘念するやとられかじも續く傳方と申る一くぶあて
空しく付丸も事血方り一旦退れ傳方の兵と事申あくと是悟一
中助方つ控く馬返されらるを助助入道堂中に入つる助將どくか
迹と云ふ也飛ぶごとく小退けけ一が後傳の宗馬と放生月毛と事と
内事變の獲足るわいとうめと方尚事あく騎人も名譽の遠者成
左助助入道とを怪し申ども退き事成れば後傳とて小味方の
陣中申わけ入るとせし後傳の山平道鬼けるうらんとて思ふは念
かりを頻小馬を打ち飛し申其間立るをうらんとて思ふは念
たふ強を打ちまら小程きてて移しひらうて後傳の事する馬の尻
曲小突當らうとされは遠物されは陰傷あかり形がうも獅は中を
そがうとく大小程とく原川の方横助ふけ申其早記事烈風の

171



駒形明神社 駒形飯の忌乃

おとくさるは終小形方成は多ひる道鬼齒ぐみを形一 敵軍を
白服人ぐまらりけれ 熱功記申あり
八橋の駅を過く今世敵村下原村みまをせの生は成及くらる河川
みけるはつと申入の経邊ぬる山河を渡小見つるううはく小見はる
きのふとやいそんままとやいむまう一我今と申は敵身老とら
今とむり一や申とては我心ワ一古今と隔川ふそのの我あはる申
され小過り一あはらふのまらうらうはけ所をさる我眼目又いまは
所あて今ときのふとのそん傳はるるわの葉月と事うらる
うはうぬおど思うたたりり小流離とて小流小はるぬ
岩村田子を一里申我内三所許お射して巻とけん傳と
敷をい入小流明神あり事はう申あしと流あり
因云むくは牧馬流神とて申中なる清間山の舞なる石作とてふ

石の里ありては氏何某と云ふ者之縁の年以約の石ありて是れ
 見し幸ひと教ふと云ふ及乃其石大石畑と云ふ地より駒の石はなる
 石地より畑出さるるを感して年々花月の中北七日と云
 する其石の石

高サ三尺四寸許



後の方長く基不れなり石を真石駒も同色く
 駒の取の内と二分程なり

佐久郡相本村
 新田

今も社を建く駒形明神と宗光おと
 け駒瓜とく下塚原上塚原と街道より山あり新く塚む
 と越く平塚原村より

相生松 平塚村あり

岩村田

小田井中一里七町駅内の町五六町あり相對し
 巷派ある其餘散在る若光寺へ別進道あり又小猪丸
 道二里あり又甲別地乃道像あり尚駅内藤原徳友
 の領地と云ふなり

恒吉祠 小田井中一里七町ありこれより
 かまひが原 芝田橋跡北流あり石ふれ林の杜有

小田系

追分中一里十町駅内武町より長く豊後ありて
 旅舎あり宿懸し東の出口小業降堂あり追分北越

け驛乃中井溝ありて流流し用水よりらもこれと云ふ所村
 ありてより飯盛ヶ嶽八ツヶ嶽見ある二四月の流中を雪あり是より
 系田系大久保橋瓜渡り追分より坂道ありて追分驛あり

信濃 追分

宿掛まで一里三所宿より一女あり
 け同石をりて道口あり

東山道 追分 宿の西端ありまねより越後のり越中加賀越前と經く
 北陸道 追分 追分より北陸道より若老より十八里越後

の界園川より新中まで追分より廿八里越後の高田二十里越追分
 より小玉乃越二里半より小諸より新あり牧野内膳より追分
 小諸田中と經く上田より種と小玉道より追分より上田八里半
 あり筑摩川のほとりへ杉平伊賀守彦の長陣越越後より法の賣抄
 あり上田中經り一鬼打も多しやより上田より新も上田乃
 奥より又上田より八里半奥より松代と云前あり真田右京左史彦忠
 兵隊共先小丹波橋より引あり筑摩川をりけるは越中中橋より
 筑摩川と犀川との中より多し川中橋より其越小横田川あり小
 むり一本為義仲と平家の方人越後城を希と合戦あり一所し

東鑑云 永元年十月九日越後住人城四郎永用

相繼兄資元 當國跡欲奉射源家仍今日木
 曾冠者義仲 引率北陸道軍士等於信濃國
 筑摩河邊遂合戰及晚永用敗走云云

淡間嶽 小田井 追分の縮野并沢

古今 甲とぬぬ淡間社心乃淡より人の心後をんて其本ぬぬ

後撰 志は淡なるもは淡たあもりの言れ義士の種れりあらん

千載 藤ふたはるは世にたをわが川の枝をのりぬと

拾遺 川とて我意守ひふ経破淡間社心のたつたはるも

新古 信濃の河をぬれ嶽中より種よりそののみやとてぬぬ

日 いろく小玉やあぬは多しや里よりひつぬる遠を乃山

勅 志る行はるはたひの種もをりてはるぬぬ人あり

續千 志まら淡るの一方其本をぬぬ人の心とてぬぬ

義永法補

紀世之

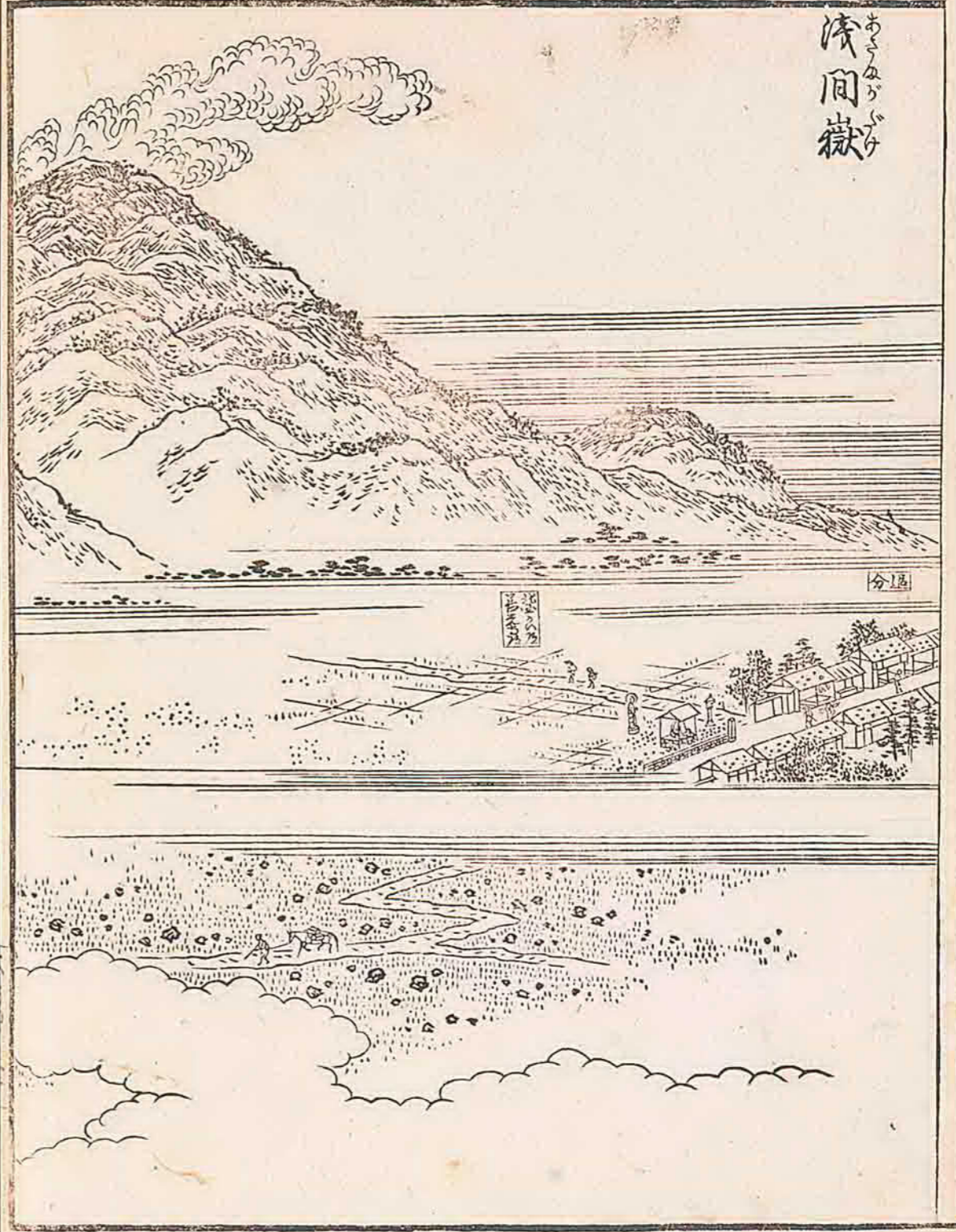
業平初居

雅經

伊守國造

伊守國造

あまのたけが
清間嶽



ゆのひり

絶ぬか
安城

清る年

あまのたけ

まのたけ

ゆのひり

清東
菴店

西ノ八



新録古
丈夫
金葉

春の空は淡白のひかりをまわすころ烟と雲をまじりて
幾志のり紙てる人客をきたるはの代書社とて
月花の院
源俊光

淡回山記

賀茂真淵

淡回山とては山にけりて人々の畏れけりける方々の道は
平らもと思はれども日影をわたり半を日影に投敷とて
さ我の目をまじりしるを思ふれいふはくもあ耶小あやしく
無きもかゝりて神よりまよ上り真はくし乃新曲と廉院し
その形もわ後半く雪をふりてあざむける形もは人のひく
背面の形もは圓形とてたまに曳く向伏しりあむりわ
まてくつ原とてけりて思ふもまよしり半言ふ焼くも
岩形もあえあうもくくくくくくくくくくくくくくくくく
取らりて天はくすりり新曲とてくくくくくくくくくくくく

とりの是れ此天の清柱とてよまわ飛をまわすころ
ゆるあ葉又とてあうるは宮を高天の系とて本意とてん
とたきわちあま且下り方ゆるくくくくくくくくくくくく
まてくつ原とてけりて思ふもまよしり半言ふ焼くも
けりて天はくすりり新曲とてくくくくくくくくくくくく
とりの是れ此天の清柱とてよまわ飛をまわすころ
ゆるあ葉又とてあうるは宮を高天の系とて本意とてん
とたきわちあま且下り方ゆるくくくくくくくくくくくく
まてくつ原とてけりて思ふもまよしり半言ふ焼くも
けりて天はくすりり新曲とてくくくくくくくくくくくく

淡回山は極く高しやとてはたの麓乃地をたぬ基とて
見くゆび等にたて煙とてくくくくくくくくくくくく

物より平野にまで三六里と云ふは、
本せむに一日中、
影も響動と四重橋の影をさすに、
け焼石道のうらうらに多くあり、
少くも耕作の傍なるに、
と付くありは、
ついで此山と江戸の方へ、
道筋の次第、
書れども、
嶽と終つゆる業平、
松俣勢物を編み、
あり又、
佛と安ん、

耐き地火突發、
敷百里、
て雲の晨の如く、
煙に又、
の邊より、
石毛の地、

頼方社

藤科神社

右宿村あり、
例祭六月十日、
過分の、
舎を多く、
とくか、

信濃 菅掛

極歩、
打ん、

過分皆掛野井沢の三駅之清田山の嶺りて其麓より麓まで一里中といふ皆掛とて野井沢をいふ事平化あり

塩沢 左の方小聖陽の池あり樹たよりいふに
電石 下沢あり左の方小見ゆる

皆掛むらぬまゝ岩沢村あり坂あり左右皆系なり塩沢村
城とて新田むらぬれ村たよ新田とありけをて平系原た
り道の左右みぬ原あり

野井沢 信濃

坂中まで式里八町野井三町より左右お射して麓と云ん
其原を山間小敷を次は新田を遠近里といふは皆物産あり
よして坂人の名付しその形も人

野井沢とて唯日嶺まで三町ありて東の坂中まで式里原
りて坂小谷より其原より信濃と日幸の内より北原
より所て其ゆる海をくして山上ありて四方の障あり

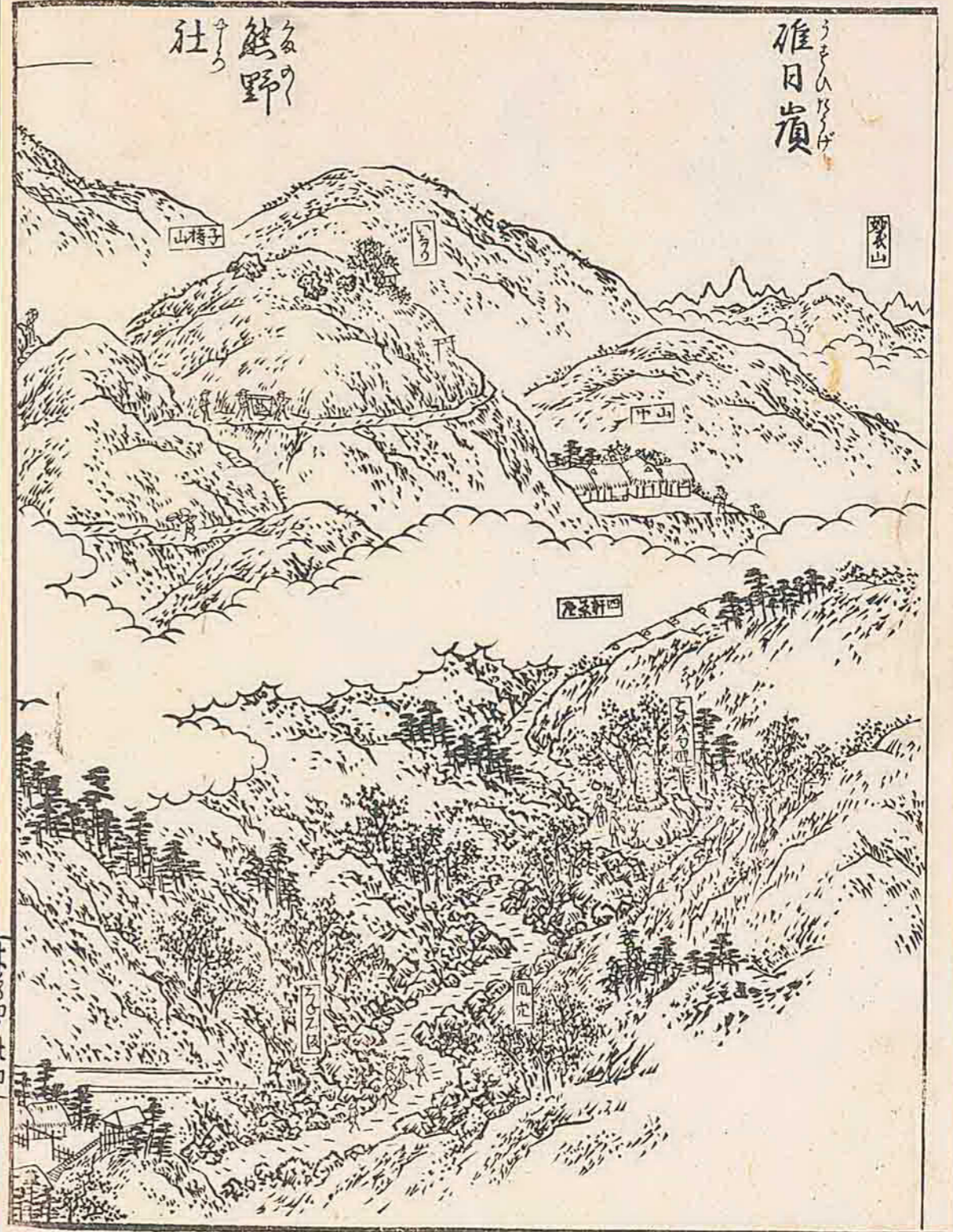
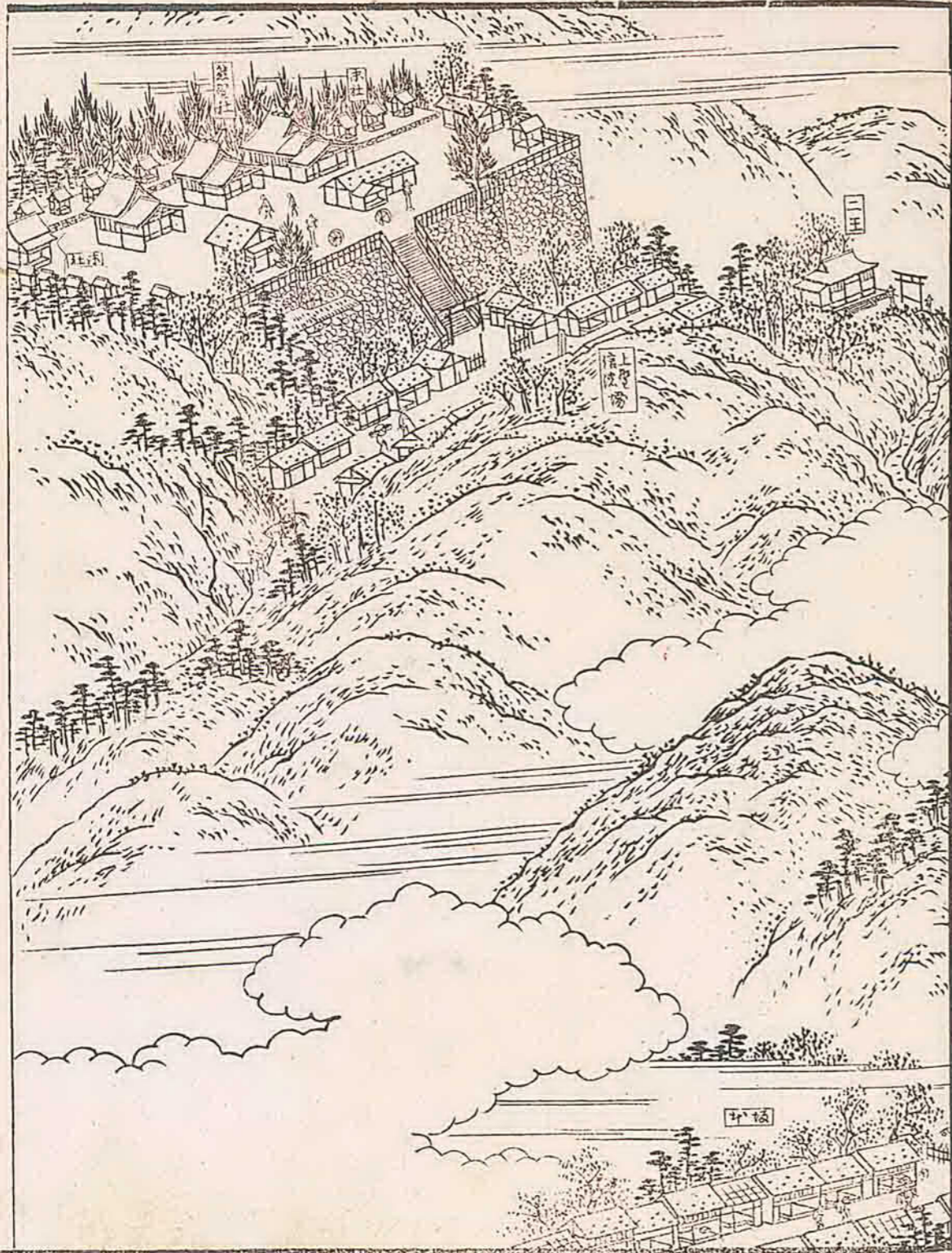
信濃より日みか登ふ甲斐飛騨も地形よく陰雪ありといふも
信濃より修り坂中を去のひも雪原にして寒く北國を信濃より
雪原はれど地の修り坂中を去のひも雪原にして寒く北國を信濃より
追ふれ二宿と清田嶽の腰より地れりて高しけ三宿の間南あり
里より東約式三里が程よりゆるる度登之寒く北原甚くして
み穀生むれ只稗藜麦のこまき又菓の樹もあり民家あり極

本形

唯日嶺 野井沢より北二町あり坂の上小あり民家あり唯日嶺名唯日嶺日幸紀
宇須比坂野井沢野井日白井東盤笛吹嶺太平も書あり

名義一説日幸武尊此地小踏踏り修りて云又け尊東延り
たす唯日嶺とて夜已の方松眺と橋を志すひ二山とて
吾孀者耶く也室ひいけ新ありてまねり東の園を吾孀也

いひありて日幸紀を見たり嶺とて向より平あり
教と峯あり神社ありて通るとるの形ありけ嶺あり



太平記諸將合戦云

西より坂東に八家流なり東海道の足柄山箱根山のや一確目坂より東と
見まはる武蔵下総常陸上野の山をゆか筑波山日光山特小
高の山とて

新田武義守義宗と足利將軍の清運小退後して在溪の合戦も幸を
達せしむ武蔵國と赤木の城後信濃を後も南の角谷氏と陣取
てりて北よりくるも北よりくるも北よりくるも北よりくるも北よりくるも
捕先鋒とて合戦其勢二萬餘騎先朝第二の父上野親王を大將と
て角谷氏小打取れ將軍小倉左衛門の合戦も幸故あり在溪も北より
より一守りたれも馳来りて取れくも千葉介小石判友も北より將とて
都合其勢八万餘騎將軍の清運も馳来りて備へるも義興義治七万餘騎
もくも到りて付くとき武蔵も北より新田義宗より北より北より北より
北より北より北より北より北より北より北より北より北より北より北より
よ大勢も打勝るべからず北より北より北より北より北より北より北より北より

定て將軍の二月廿八日入溪城とてむく北府も北より北より北より北より
源氏武田陸奥も北より北より北より北より北より北より北より北より北より
司公始とて都合式も北より北より北より北より北より北より北より北より
よせく敵の陣と見ゆか小石生流の北より北より北より北より北より北より
取て牽りぬ旗の清旗と打立ぬりて北より北より北より北より北より北より
の旗とて旗も其教満とて北より北より北より北より北より北より北より北より
とて甲斐源氏も北より北より北より北より北より北より北より北より北より
荒木の城後勢も北より北より北より北より北より北より北より北より北より
逸見入道以下宗虎の甲斐源氏も北より北より北より北より北より北より北より
千葉介宗政も北より北より北より北より北より北より北より北より北より
が陣へ押よせく入るべく取れく信濃勢も北より北より北より北より北より
宗もも二百餘騎討れく相引小石左衛門と引けを西陣全勢を
追ひ返り其日の平朝より西陣の終まで少くも休む勝あり終る

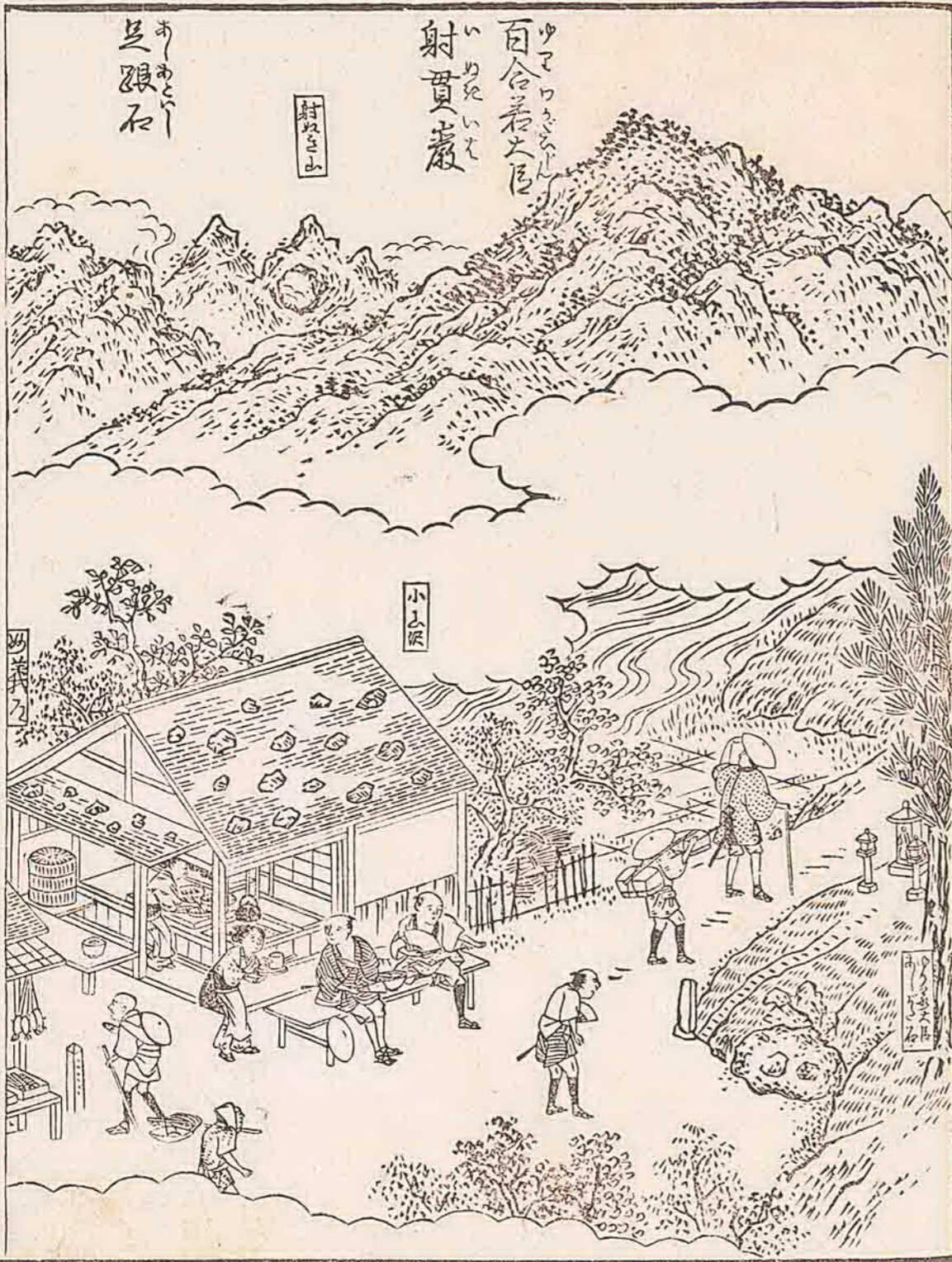
千代の書してはわすれ小勢とて大敵小敵の鳥雲の陣小くお
 鳥雲の陣とて先後小山とあてたや水谷境とて敵と平野小見
 ねた一我勢の程を敵と見せたりて虎責狼率のつとく討たれど
 敵の陣幸小鳥雲も尚とてつとく戦つて利有るうとて武勇
 若武者もれば毎度度とふうけおと大勢もとて中れり同百發敵の
 千代はひ破るやとて敵目小おゆり程の大勢もれば新田上秋はあ
 ちりて笛吹峠へぞ引上りたる下野妻一きと
笛吹峠上杉武田合戦云
 け武田大膳吉丈晴信も瘡病めて引籠り終ひぬば代官とて
 板垣駿河守初大將と仰桑原左衛門尉禮を日向大和守小山田左
 兵衛尉小宮山丹後守昌友逸見勝江小曾南郡小信初先芳若田
 下野も相本市三郎尉を指副とれ其勢都合七子終人十月四日小甲
 府をさく搦と搦と押得小日とて六日の已れ小宮通の追分なる
 将并法をす越と笛吹峠も地付り上初方先陣を上回又次郎

日本武志の雅日嶺
 より辰巳の方以んちり
 橋をさくく吾婿く
 と字よこれ吾人の祥と
 金石のてく後世までも
 稱しける



見田五郎左衛門松野田等なり既小三万三千餘人の軍勢先多ふ人
備後作と世方へ赤坂後陣と隠く備と立く作の彼方本押付く大將
板垣信秋今日の先鋒と信秋は重下して備後作は龍舟向ふと龍
見上れば勢漸く二分一作は方より敵より後陣の勢と信秋は合戦
を始んと討別を我も極きと敵の大勢陣と越ぐる勢に急いで打く攻
前も二陣本陣も一未陣とさくく下は敵あり下は宮城といふものに
敵の先陣上回又次第が先鋒藤田丹後守が陣を去敷を極く突てか
三科肥前守廣徳に左衛門尉一妻本陣に入ふと我も極く士率に
押さくや突入く追川さくつ敵より是と見くし回又公常後回付
すも極きやとて丹後守も下手にあつてお戦ふ後回士率と勇気自
龍を抱く龍まう所を廣徳に左衛門生年十七歳と名をかく丹後守
也押入引廻て西馬が向小島あつて志づ一勝負をあつてひたつが
難行く丹後守抱くお入首控切く起上まは後回が從兵主と討せ層不

せん也退取春度瀬が即ちお我も見く追く小龍守と敵の即退を
中に取籠く只下小五人突伏しう後兼傷城急く是非なく其場と
敗走し上列勢は後陣と候く後々也とある雨と板垣急し切敵ふも
大々敵軍辟易して旌旗四散路本丸まゝ丹後守も早討れぬ也
つらねて我もあま者ども返へ各々也坂中下くう前敵を見おせ
口が軍勢はひく競ひあふ敵は後陣と候場とさしと我も極く
上列勢の二陣降忌軍人これをえとくきたあ者たて退てり武田勢
の曲淵に在る一妻本陣を今と然も龍舟を討たるも進んで攻ま
二妻本陣と曲淵本陣とぬ剛兵急遣の神代にほけく陣を極く
馳入へは作のけ方より越する五子隊人の軍兵立是もけく一戦も極く
らねく右佐左佐不進走不降固集入踏止とて守込に心を掛く所
風情も敗士を恥しめ居る所も二科肥前守生年十九歳とれ本相
おふと心く先子の清役者とて我もえこれ新級軍小及く上はけ不



切所にて公の儘よ小返しもあらずに見奉るはれおれらるるの形
 迷月勝負して教るお首さうも殿の去産お仕更といひ怪小陰控と
 けり合ふ公將さるや昨思も互小陰お合存く怪く強くと見る妙よ
 三科力足と踏ぐ鉄壁も碑並と突給ふ軍人の内甲と突まき馬か
 洋よぞあつらるる肥前も右あく首公さる事なく二陰三陰も小標
 拳動て則首公控母に松井田を移をえとくちひ好定信とは真の振
 舞ふか是非小返して討死をせよと究竟の者と馬あし連子備と屠
 仍小まき切所を越せ二二二本及討へんはあ公粟米日向相本若田氏
 始とて朋勢とめと突つる中も上盤を及も向念泳を布首と
 そり己を子負引返く上枚勢散々に討負し作を越く敷さると追借
 く討死程小款の首公ゆる事一千貳百十九級武畧すめく小公めて
 大月勝其日の午刻よけりて大將後河守信形勝國の法式を執りせ
 其身床几小腰をうけて軍政と奉りせる分世へさうらう軍將の如くて

天晴美く一帯を巡る小舟 舟の笛吹合戦記を

熊野権現社 熊野の権現社の所あり幸社三本末社多し一帯に殿神樂

信濃上野國塚 塚あり

刈石坂 十八所坂險難あり

万葉 山の中白碑あり

野井 野井をまわると野井の河を阻んで南の海まで

一盞の酒を酔く道下倒すく泥のどろり形は半紙の

新をあらびり道はれいあまのままもままの日は

糸をあらびり道はれいあまのままもままの日は

糸をあらびり道はれいあまのままもままの日は

糸をあらびり道はれいあまのままもままの日は

糸をあらびり道はれいあまのままもままの日は

糸をあらびり道はれいあまのままもままの日は

路はうたをいふ坂本の歌の所

上野 坂幸

松井田中を二里守南駅五所許民家相對して巷をよみ

上野 横川

横川の流をめぐりあまのままもままの日は

上野 百合若足

百合若足の道はれいあまのままもままの日は

上野 射抜

射抜の穴あり

上野 魚山

魚山の穴あり

上野 松井田

松井田の穴あり

上野 八幡

八幡の穴あり

天晴美く一花見て小春の
つらき笛吹合戦記を

熊野権現社 熊野のぐんぐんの中 熊野の町あり幸社三本 赤松多し 熊野殿神樂

信濃上野國 熊野権現の社あり

刻石坂 十八所 坂險難あり

万葉 山の中 白碑あり

野井 谷をまわるとやわ坂 嶺あり

山かきあつてまてさるわね河を阻つて南の海まで

離まてくまふくふ新路あり

一盞の酒は酔ふ道は倒まて泥のどく形はひま

ぬつてろてまがけ権現をまわし山の中村あり

に観ひ伯夷あり糸と蕨餅を活す

路はうたをいふ坂あり

松井田中を二里守南 五所 許民家相對して巷をまわ

上野 坂幸

松井田中を二里守南 五所 許民家相對して巷をまわ

上野 横川

横川の流をめぐりあり 青街樓あり

上野 百合若足

百合若足 石の道の側あり

上野 射抜

射抜 穴あり

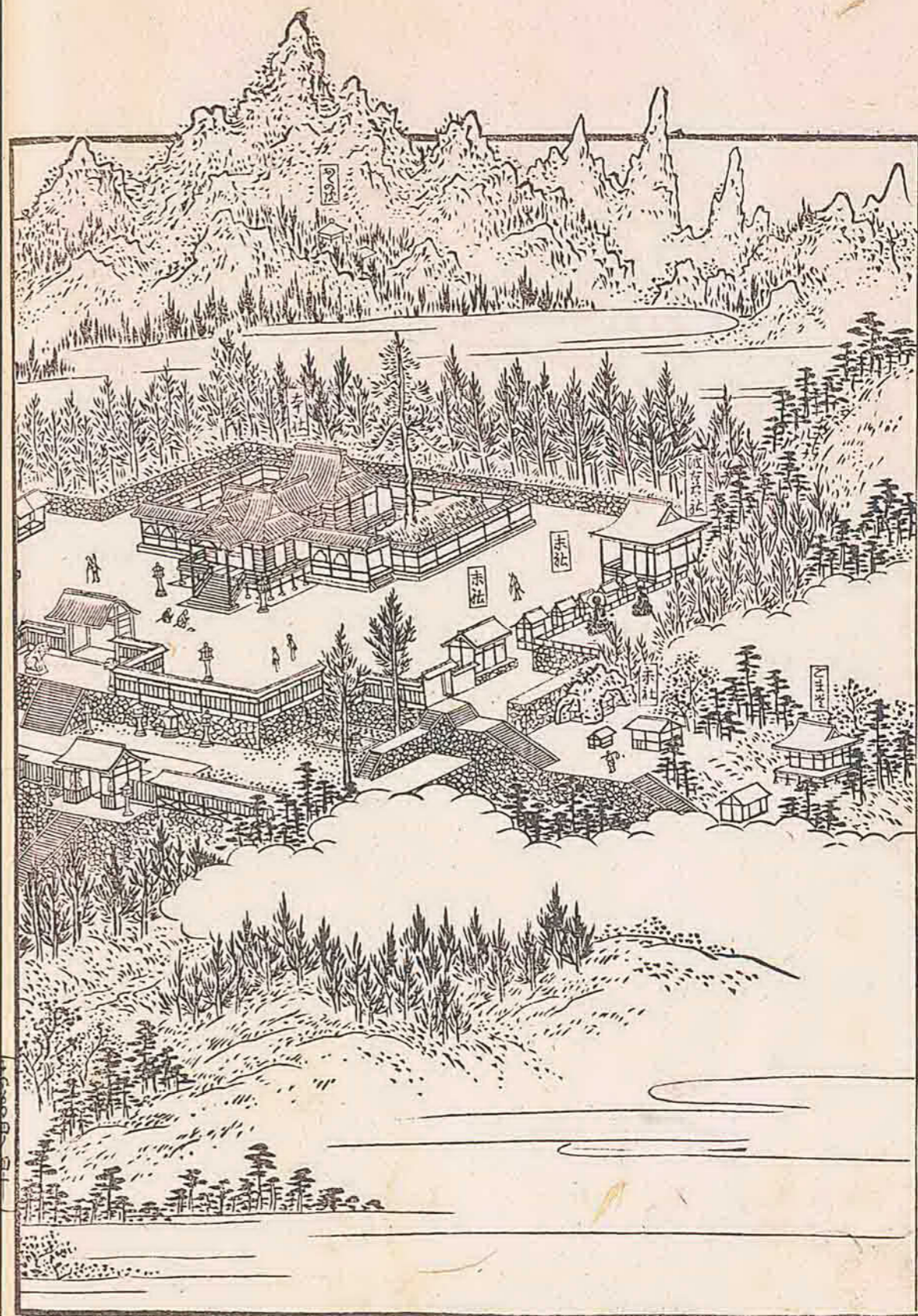
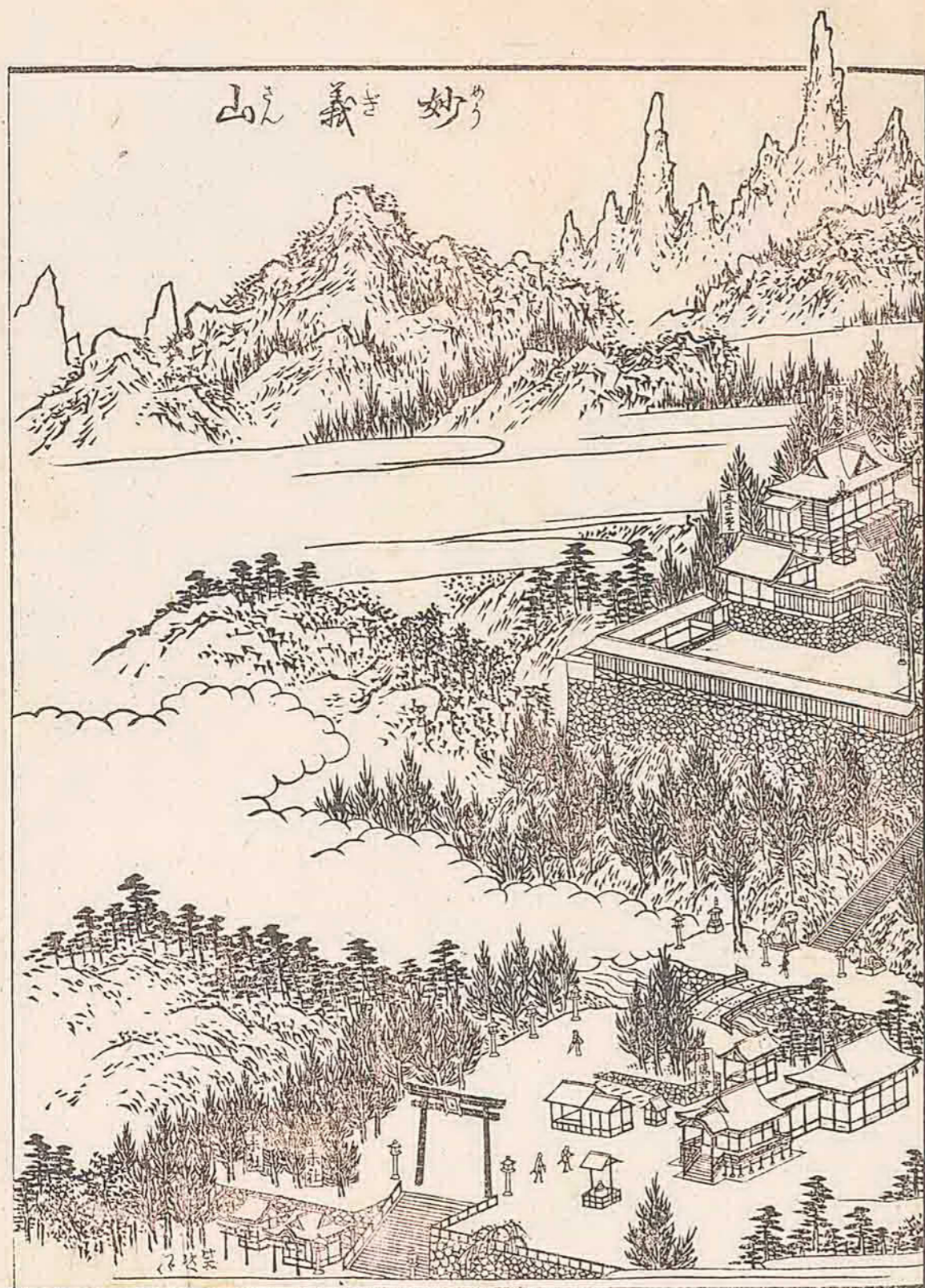
上野 急山

急山 坂あり

上野 松井田

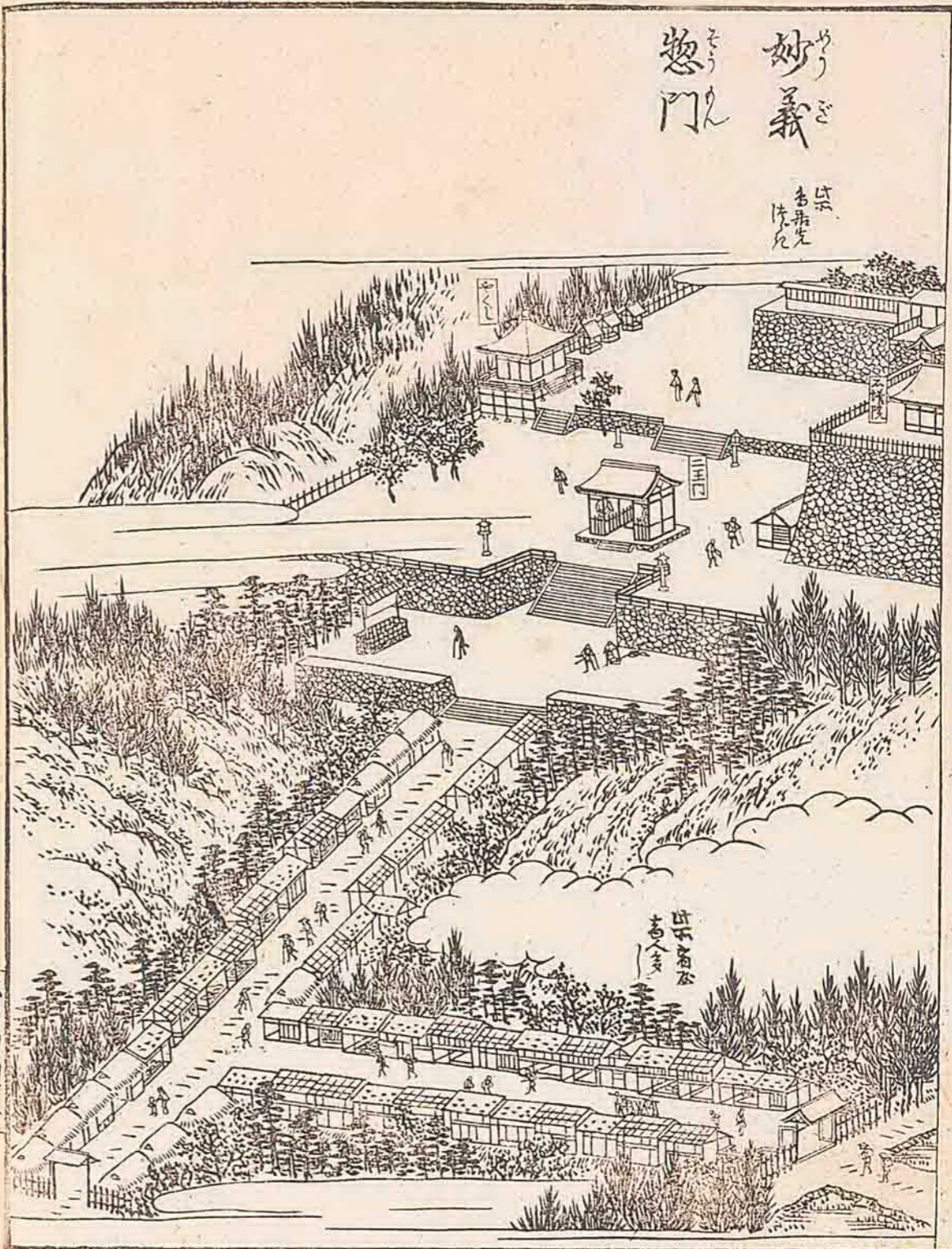
松井田 八橋文の舟

妙義山



惣門 妙義

名所
先



白雲山高顯院 俗小妙義山と号し松井田より入る又横川

奉社妙義大権現 社殿員齋く

波古曾神社 古山地主神

天神宮 太神宮 末社 八幡宮

神樂殿 繪馬舎 護摩堂 浄香水 あり

辨財天社 飯綱宮 観世音 欽喜天

飯綱不動 巖窟 大荒神 中門 兩脇あり

廻廊 巫女列を系指人母神託を 石階 百六十五段

御湯釜 三ツ 隨身門 左右小随身立 石階 百段

鳥居 類白雲山 辨財天社 稻荷社 大黒天 人丸社

抱瘡神 藥除堂 石階 二十八段 奉坊 乃右 橋 濱川

石階 九段 神馬舎 下殿の 惣門 類高顯院

そ神島山と波古曾神社姓古よりの地主神より延喜帝の

浄土延曆寺第十二の座主法性坊の意僧正は浄土子菅聖相
ゆふあれた遷移をうれ事に夢ひ岳岳を退きけし妙義山小南右
一峰抄は浄土と青岩峭壁として山勢小山人偏小をさき靈
嶽より遷化のほろふ妙義権現と崇光貴賤の尊信意をば
特小今より百五十年前奇特ありてそれより宮舎殿閣壯麗
再興ありて日夜消人絶る幸ふ一幸坊と石塔院と稱して天台宗
東叡山は属に例案と九月九日山中に大杖七中あり何事も日尋
五尋まわり有奥院と幸社より廿八所あり岩角をばさひせむを
大日尊安次門前の旅舎と武町新形ありてく山峯に書院を
湖の濱する人の宿とて其のほろふ一處は百餘人も泊りて旅あり
いと人形形一靈路ありとて関東の人民も形とて其教湯作らば
にありて消人多し海が尚ほの靈地ありてけし山のすがこせ小形ひ
かた奇異の分野るわが神靈ある幸むとてわが名とよむるべ

靈ありぬる新まら志ありありと我もまらなる

琵琶窪

原一村

琵琶窪 平北あり宮の窪ともり
原一村 神明あり海ありけし細細細繩を
松井田をまき遠坂の神明あり墨のうらみ法座を築きり妙
義山へ消するは横川へ入りてけし地くゆる又江戸より消する人も
お終るを今も横川へ出たりり琵琶の窪は板を越く上流の巢
山王村は山王の廟あり八幸本村は親善堂あり原一村
一里山むらぬるく安中の駅ありてか

安中野

十餘所あり其処左右ふあり
け駅をこくく碓日川ありけ次中宿の出船れもて又け川をこくく
あまのく安中川より中宿宿まきく善果山の岸根坂碓日
川流る意流たり善果山と切まらるめくれ崖山とく

上野 板鼻

高寄中で一里二十所は狭民居三三所なり相対して
 其條を散在に

貫系神社 延喜式内膳神
 八幡宮 八幡村ありありひりひり八幡を所新敷奥の安倍真任家任伝成
 のと九下向一移ひは所一畝一移ひ一畝一移ひは神を

御祭八月十五日

本社 中央應神天皇 東神功皇后 西仲哀天皇 筑紫

神樂殿中門 神あり 惣門 二天と 末社 山王 其外多し

本地堂 孫陀三尊

若宮 八幡宮 上野岡あり八幡寺即腰掛石の回廊より上例東三月十五日

鳥川 河原あり

板鼻をさく八幡むら坂塚村女法回権現の宮あり豊田村を
 経て見るとさば高寄川よりさくさく流るるに日と原野
 此条の流より物と樹と木の影とを雲と峯と松風とをく山の



くらし
 神ふ
 ひり
 依此
 為世
 雪乃
 夕れ
 飯盛

高崎野

高崎野の地は一里十九町は所と松平右京亮彦居城の地
城下の所長一凡二十町をうり繁栄の地といは國都會を地
あつて月毎六日の市あり第一舟上列宿館煙草白同行とて
馬の鞍巾用其外後々の物出物とて交易を賑ひいそごふ

佐野

佐野舟橋舊蹟 佐野舟橋は舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋の跡は舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋の跡は舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり

河原

河原の佐野舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり

全系

全系の佐野舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり
舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり舟橋あり

夫木

定家卿宮

佐野源左衛門恒世旧蹟

定家卿宮 佐野新府村あり新府村あり新府村あり
佐野源左衛門恒世旧蹟 佐野源左衛門恒世旧蹟あり
佐野源左衛門恒世旧蹟 佐野源左衛門恒世旧蹟あり

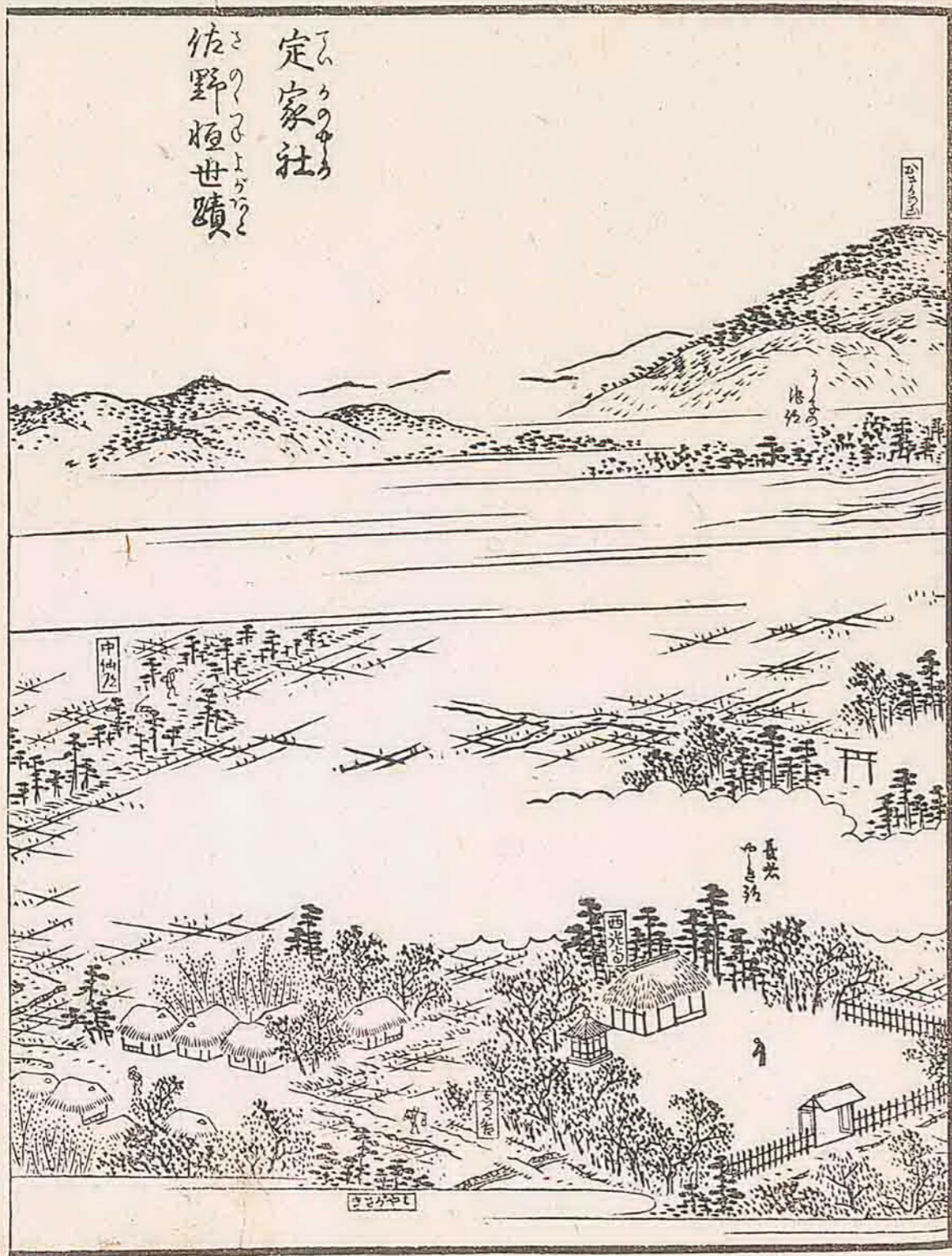
佐野長者屋敷

佐野長者屋敷 佐野長者屋敷あり佐野長者屋敷あり
佐野長者屋敷 佐野長者屋敷あり佐野長者屋敷あり
佐野長者屋敷 佐野長者屋敷あり佐野長者屋敷あり

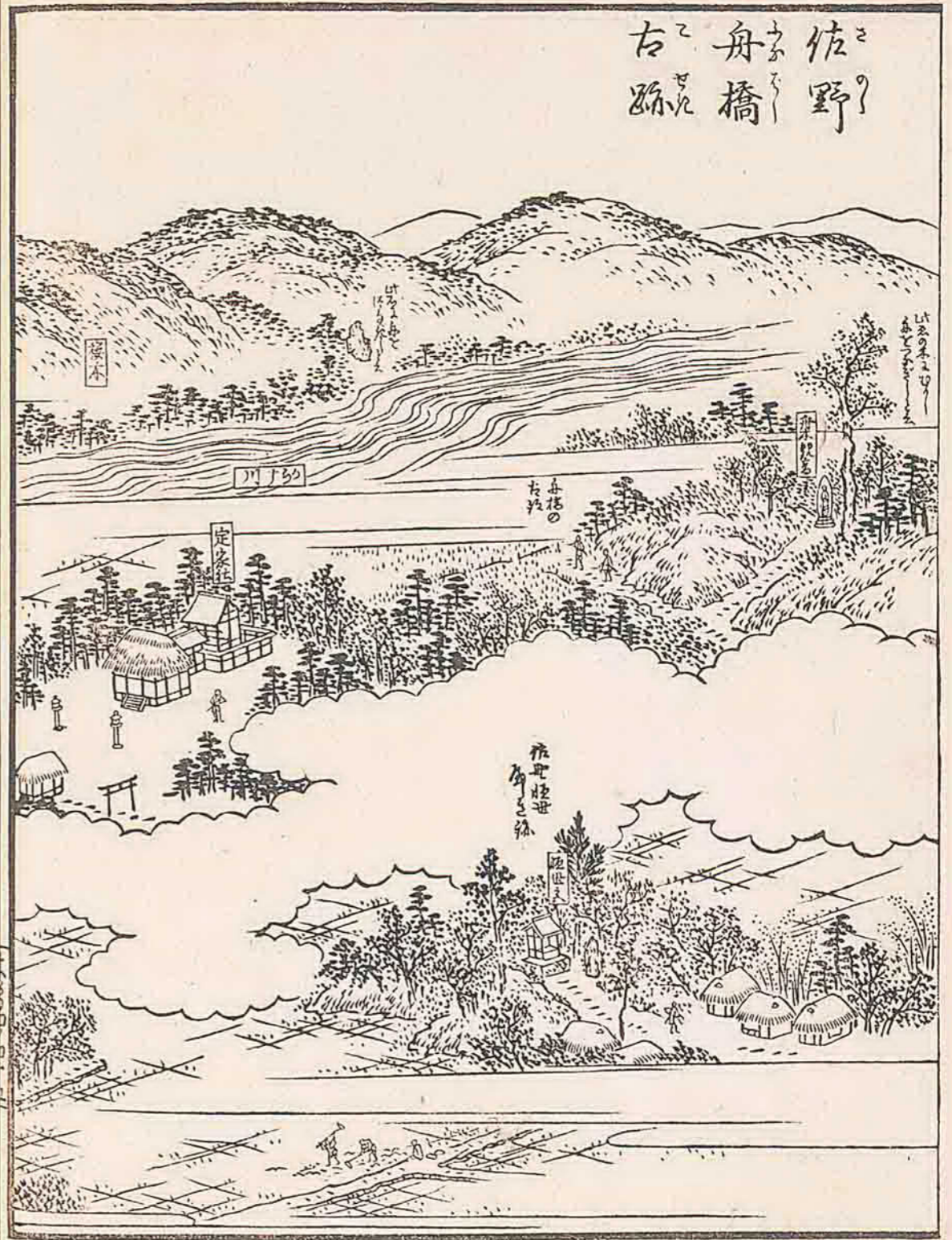
倉加野

倉加野の地は一里半は秋六士所をうり民衆相對し
倉加野の地は一里半は秋六士所をうり民衆相對し
倉加野の地は一里半は秋六士所をうり民衆相對し

定家社
佐野恒世蹟



佐野
舟橋
右跡



園小素次裁家宅の多くを益事をしていふに嗣をさかこれ者て
絲瓜練功を矯く緋小織子唐の玄宗と宮中にくる齋を素一め
嬪として女工の幸かおしむ我朝も應神帝此沛代は兵服織
婦の二女ありておれを教く宮中もいふを給ひ一幸あり

上列勝頼素唐唐攻

勝頼其日の装束ぬる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
白無織の毛笠をぬる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
一宮たきま主人の矢面ぬる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
合多まの棟をたひは敵の煙と漆中に親中引退くと道さへせ退路付
入系に早城戸を立合をく井取の内ぬる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
敵六人を相手に一獅子畜逆の怒をぬる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
左き支羽城門を押破つたきまらふ唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
給うて突合らるるたきまらふ唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
け場は見捨く引退れぬ家も成をぬれ唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ

本朝の四十二

らねくを得たりや取く返さ所は清見中根石黒城も張る唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
力と敵世鎗脇よ思所城の土屋敷を一字に城門小素次はあ若共
く勝負小搦ど二の門の内ぬる直や糸入唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
乃を原隼人佐土屋敷先を越られりや押續く素次唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
人と渡合せ張あがら唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
此左通も糸入唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
本はだの口でなれぬ唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
續らば本丸ぬ引へけ時味方も息が休先幸丸も糸入人と我孫
たりる勝頼も糸入唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
水の手廊れありる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
彼んや勇進む唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
寄く水の手廊れありる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ
てせんと母なる唐衣とらふ帝代の腹巻は宗後の羽織をぬれ

つりき武田勝頼軍記と

新町

奉庄中にて二里南駅六七町あり
 民家相對して巷を打ん
 金鑽明神祠 例祭九月廿九日
 祭神 素盞烏尊 奉社の左右内外社 楯為 杖葉
 其外新社あり 奉庄堂 不動尊 狐安ん 尊君の乳 金鑽
 大の神と書けり

上野

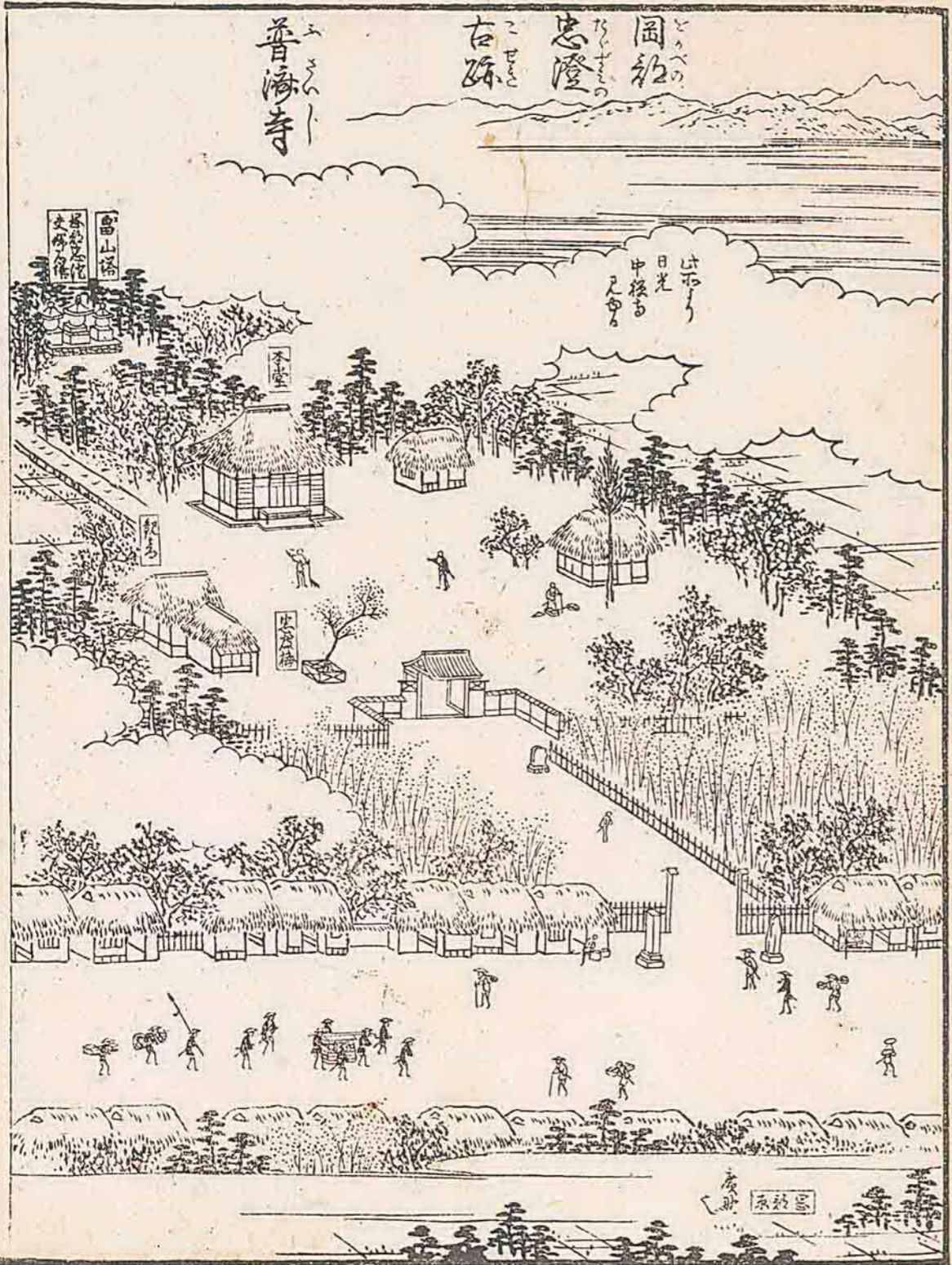
武義國場あり

は新町より川をわたりかたを宿かたをむく石神より
 左の方面赤木と見ゆふふ士峯も似たりは新立場之晩念寺
 村分るく小橋村よりは新より抄もこの道あり左の森の中は
 あつちを金鑽の原よりあり

本庄

原谷中にて二里廿九丁は新民居三町町げりり相對して
 巷分るく祇堂の神本あり六月廿七日祭あり
 南駅をより備尔堂村より上列武列國界の標多分違ふ故不名と

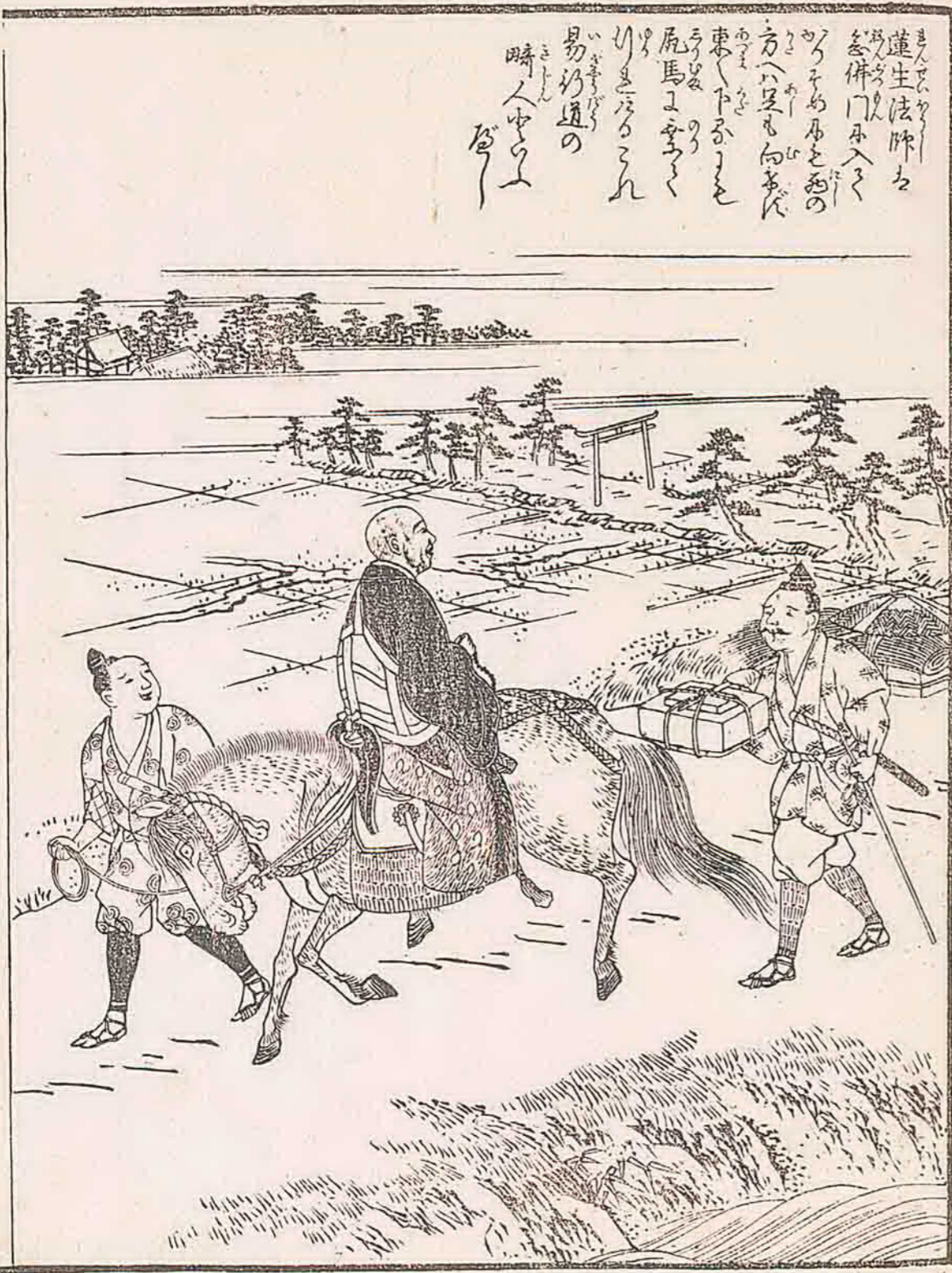
本庄四甲十七



けりぬ大市あり人教多群集して交易があを幸多し
 それより堰田むら小山川帯るの橋あり岡の郷と名は六孫
 をが佐一と名はあり

岡部 原 岡部村あり
 岡部 忠澄 古跡あり
 普濟寺 岡部村あり
 本尊釋迦二尊佛 忠澄墳の中あり又支那の本像
 當寺とむら 岡部六孫を忠澄に郷を領地してかの禪師
 道徳を感ず殿閣を造る幸多し十一面觀音あり
 舟の親善と雕刻して安善に拆忠澄を皇世一代敏達天皇の後
 亂たり初と惡源吉義平は属し平治元年十二月廿八日平重盛
 と待賢門より親ひ大少武勇と稱ひ壽永三年二月七日擧列
 一宮の合戦小平忠澄を討つ首級を得るけね其勲功の著し七

蓮生法師の
 念佛門に入る
 方へ足も向ふ
 東へ下ふも
 尻馬に坐る
 易の道の
 崎人の中へ



忠度の采地五邑と忠澄小賜と忠澄武列秩父郡我井村と岩嶺を
穿ちて石室を築き自像を石壁に彫り其傍小経院と建ち
忠澄菴と號し又武列秩父郡岡部小経にて岡部を名乗る
墳墓を築き忠澄靈神と作る其外良徒の古墳数多く
あり宗祇法師行御のといはれ塚ありて懐柔の和音法師に

かたを向ふ岩柱北条の古塚小好の志原に北松風を吹 宗祇法師

深谷

深谷中より武里二十町に深谷六十七町并民家相親し
巷に石の鐘と左右に散在す

親音堂

深谷よりあり一本の柳ありと云
菴園坊の碑あり其銘本日

我佛は入る風程かきく東風程ふ
おとほはく佛はをさくは

おぬ事か知れくおぬ日やさくおぬ

これ状見く

はくおぬくや柳堂骨と非事ありあり

菴園坊 祖岡

け深谷のゆけは大本の松むくまう道の幅も廣くして妙のけく
江戸小辺を志れ東方むく新部村と立場より築居あり高
柳をさく後松部回新島村あり植木むくかるく市原むく
ようと深谷の形よする

鷓鴣

鷓鴣中より四里八町に深谷三三町民家相對して巷とあを徳の
左右も町あり至く旅に所より種より秩父山に三里半
は麓に島とく島山重忠の旧趾に城の如く江戸より島
十六里深谷より幸多二里半南の方なるを永井八八二里半小
ありこれより海を別當実盛とくみ所とせき里半ありけ宿

に赤城の林の原にあり

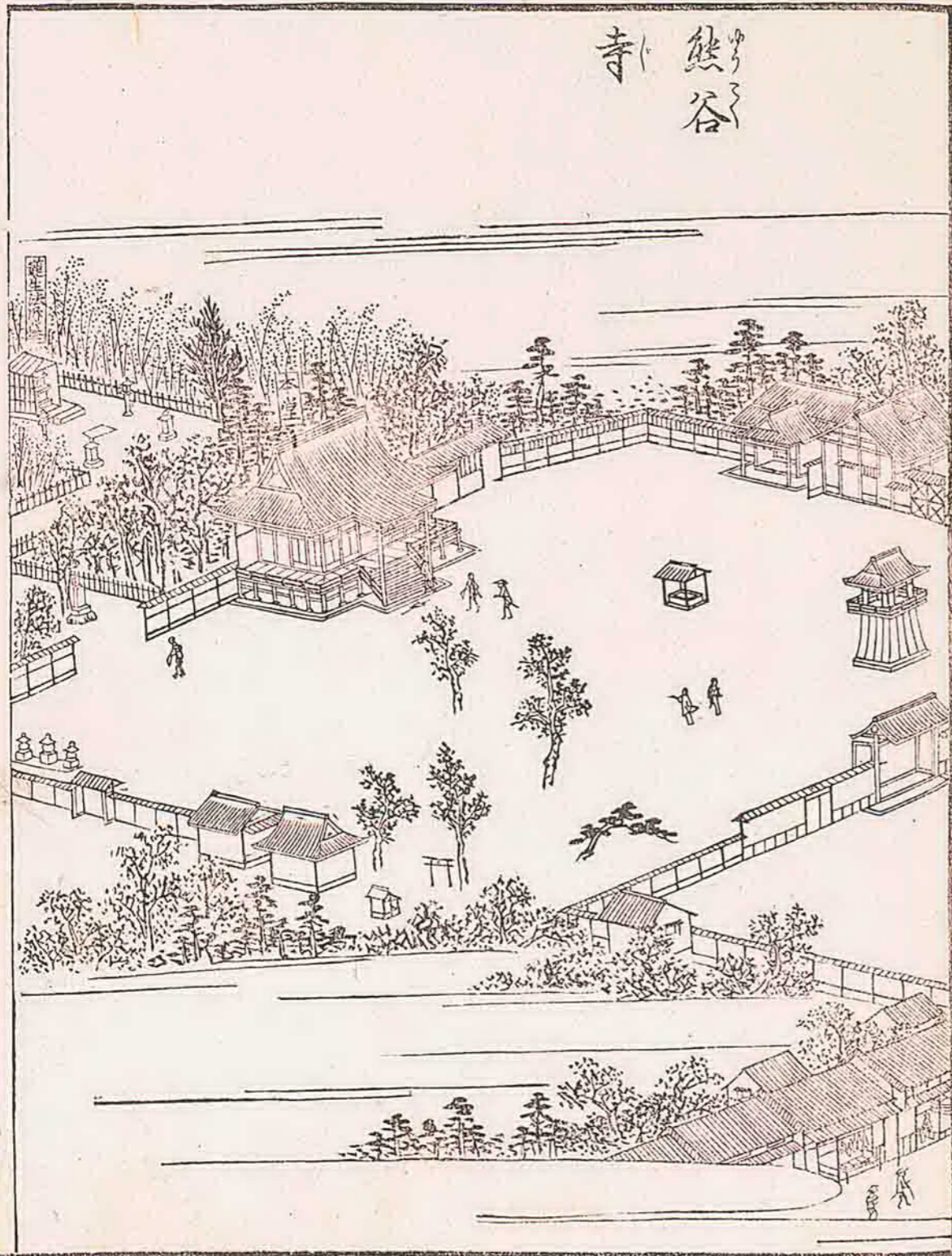
蓮生山

蓮生山の宿中にあり浄土宗

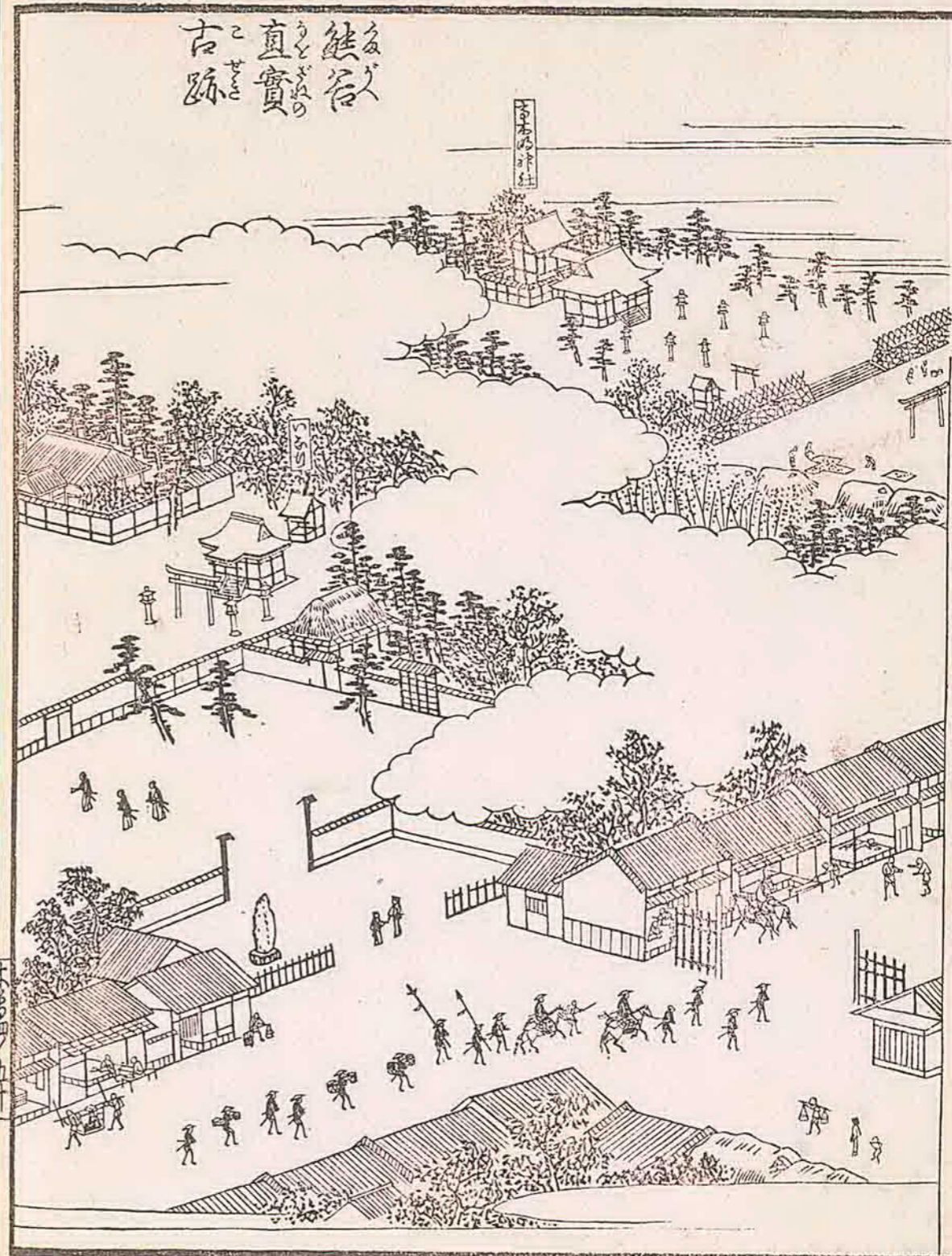
奉尊阿弥陀如来 惠徳の徳多田満仲の息長丸
持念佛の坂東阿弥陀佛の其一なり蓮生

法持

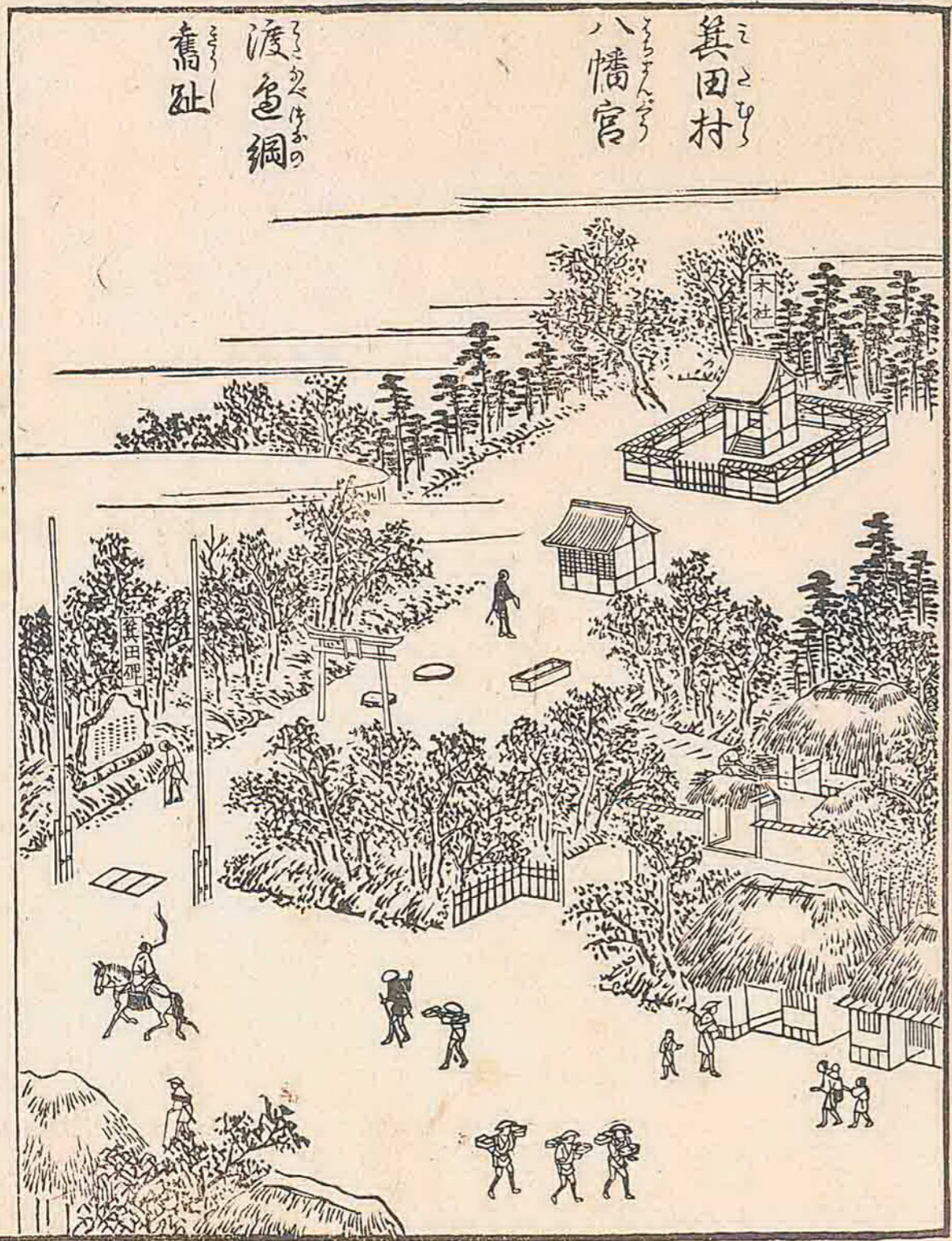
熊谷寺



熊谷
直實の
古跡



蓮生法師本像 本像 日墓 日墓
 抑徳治帝直實と桓武天皇の後胤平盛方の子と若冠乃
 と兄開東に致さく下直光の聲とある成長は序の武勇からさる
 うて都待賢門の合戦少の懸原善義平に属し十六騎武者を
 随一とゆき石橋山の合戦少の懸原善義平に属し十六騎武者を
 當小嶋の役付する幕と物故を其不熟功乃威状並通して賜り侍
 其後壽永三年 甲辰二月七日掛列一名乃合戦少の懸原善義平に属し十六騎武者を
 討く首と賜り吾子直家と戦場少を足先ひ一討の想より之敷盛
 心の父母此歎のひ中を母のけりあれたをさるり且其母を掃を掃ひ
 其身弓馬の衣よ生れ後生の思も思ひばお種より後公の心息元
 その後建久二年の冬久下捨也直光と鎌倉より移る武蔵國久下
 熊谷の境北条隆の援遂不整を以拂ひ豆列走湯ひゆけし甲午年終不
 登り法然上人の御弟子と知り二公を人念佛の行者とせ成小字を其後



禮をく元之二年故郷へ帰るに上へ願ふに自ら画迎接の
曼陀羅 希ふ 帝自他の御新賜の蓮生を後武列へ下り
附不肖西宗の行者とて後初めを西宗後本せり馬ゆを導く
宗くは瓜妻せり蓮生法作のまに

後去むと別の著るや沙はさくあむひて後せり

建永二年九月四日午刻住持を去き佛勅があつてや村里の辻に
まきさる果して其日一人とてや喜樂園へ異香葉下て眼を
けりけり住持を畢ぬと後宗人として遠近の老若寄侍とて指
麻のてり紫雲の庵の上より止居半一附修りてあつて去ぬ
これ上宗住持の靈瑞く後世天正年中情隨意上人中興起有
今の慈光寺にあり

鎮守 孫三左衛門 稲荷の神 伴弘法大師 凡ゆる直意 不斷 法尊 あり
て 猛敵 討 陣頭 あり 一 附 慈光 孫三左衛門 と 名 あり 並 實 小

力と流致い小勝利とけり特小一谷の合致も大手の先陣も向ひ
割りたりいかに彼人付過ひ加勢を志けり後り凡不思後り小其姓名
狐向常に汝が信むる所の稲荷神と名難と救人あり慈光孫三左
也現とるこそ忽其ありと隠しり小部居珠に宮舎を営くこと
宗光今尚山名住守一も

尚山什寶

放光名號 和款名號 弁替名號 弥陀二尊 真筆

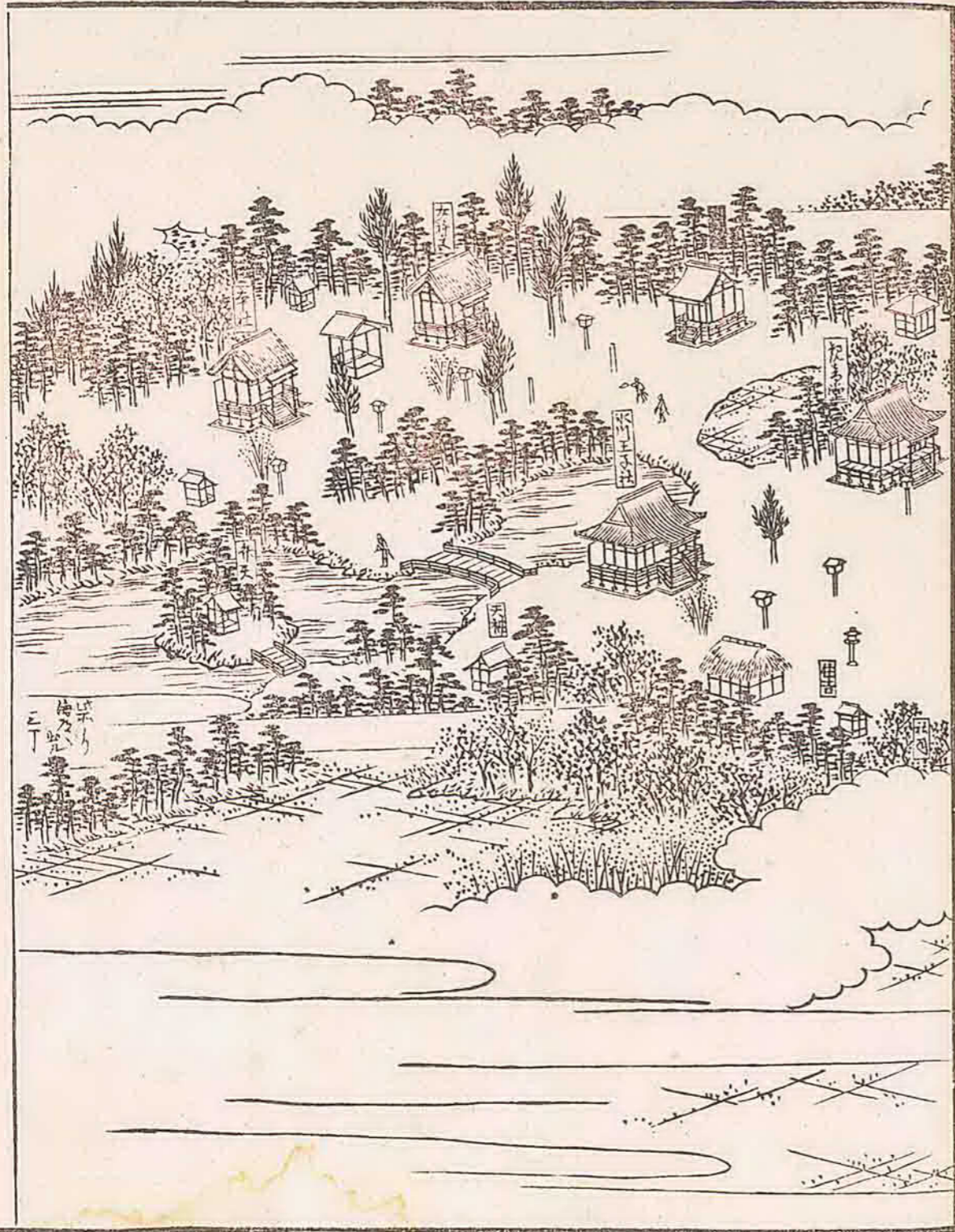
直實兩持母衣旗名號 日真筆 理書 日真筆

阿弥陀佛 蓮生法作也 裸形弥陀 傳來

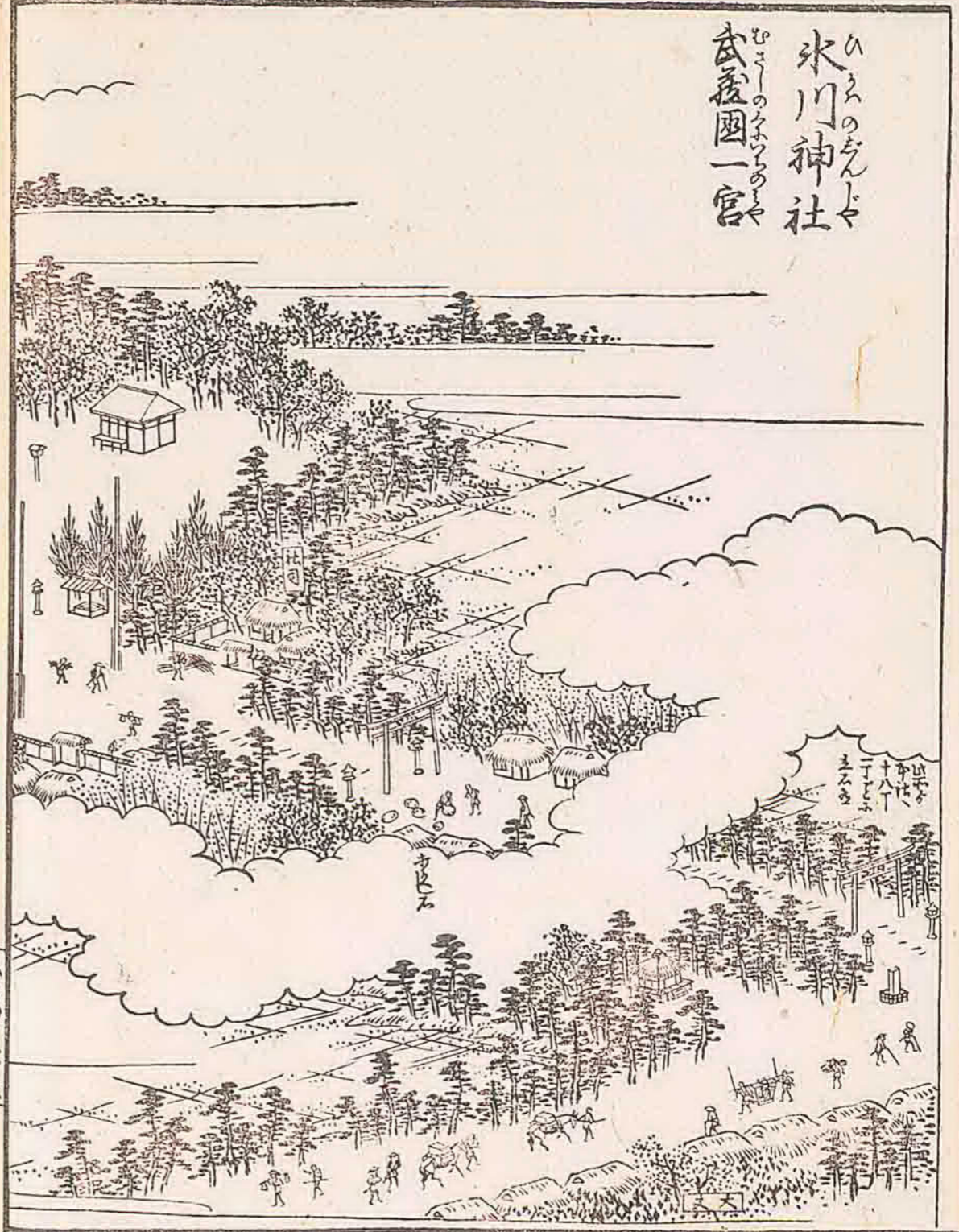
迎接曼荼羅 蓮生所持 慈光孫三左衛門 稻荷 神伴弘法大師也
蓮生所持及 肉二弥陀二尊書 念珠 鐵鉢 証 以上 蓮生持物

十五遍名號 蓮生筆 送馬画 狩野信信筆

壽牌 火防名號 不斷光佛名號 幡隨意上人筆



ひえのえんじ
 氷川神社
 ひえのえんじの
 武蔵國一宮



御装束 殊數 幡隨意上人所持 子孫に置状 蓮生自筆

平經盛卿返状 訓閣集拔書 蓮生所持 運氣考并旗竿等寸法

幕 石橋山の戦功ふよみく 將軍朝公より拜領 騎鞍 蓮生所持

熊谷直實居城 戸田八町村より東行寺より子孫寺ありん

東鑑云

治承六年六月五日甲辰熊谷二郎直實者匪

勵朝夕恪勤之忠去治承四年追討佐竹冠者

之時殊施勲功依令感其武勇給武藏國舊領

等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直

實此間在國今日令參上賜件下文云

下 武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補

所領事

右件所且先祖相傳也而久下權守直光押領

事停止以直實為地頭之職成畢其故何者佐

又云

治承六年五月廿四日

汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯籠自鎌倉令

責御時其日御合戦直實勝萬人前懸一陣懸

壞一人當千顯高名其勸賞件熊谷郷之地頭

職成畢子々孫々永代不可有他妨故下百姓

等且承知敢不可違失

治承六年五月廿日

久下

吹上

箕田

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

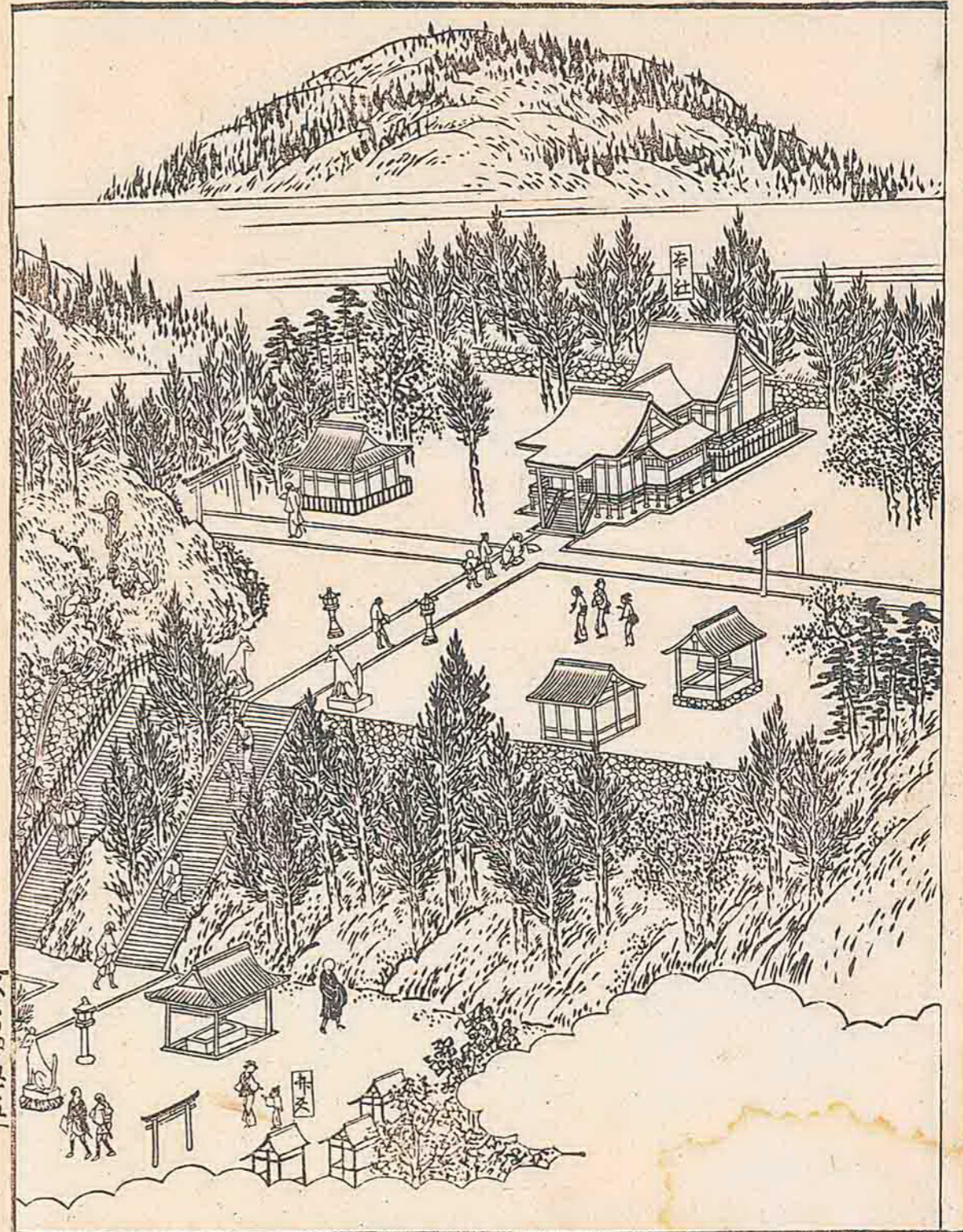
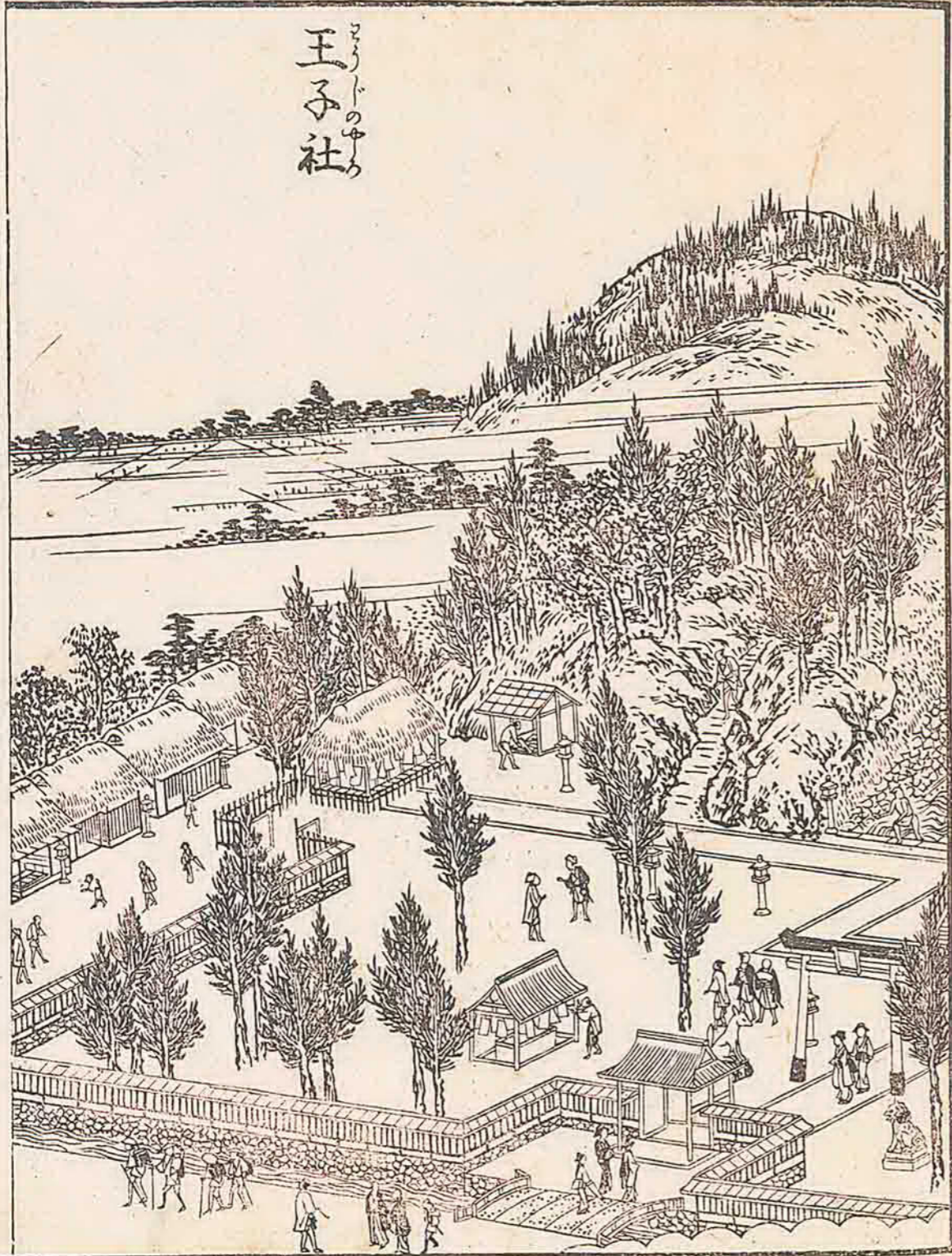
久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

久下吹上 熊谷次郎平直實の御時

王子社



武 鳩巢

楠川まで一里二十町 高野三十四町 民家相對して巷を
おれ甚だ散在して住居一々宿小葛味神の御所あり
又大木の杉松大竹の林あり左の方に鍛冶並に日光の道有又
こふ勝願寺とつと浄土宗十八檀林の一寺あり東に三新堂
松色と上田村は薬師堂あり又淡間宮より小元鳩巢より天
神の御所あり多門寺ありと新田の村を過て楠川の御所あり
上尾まで二十町 高野三十四町 民家相對して巷を宿あり
浄念寺とつと寺あり又岩付の道よりあり
け歌城とつと所屋村あり此方より窪村より雷電とつと林あり
この月より雷電の御所あり門前村あり此方より畑村あり
おれより上尾の御所あり

武 楠川

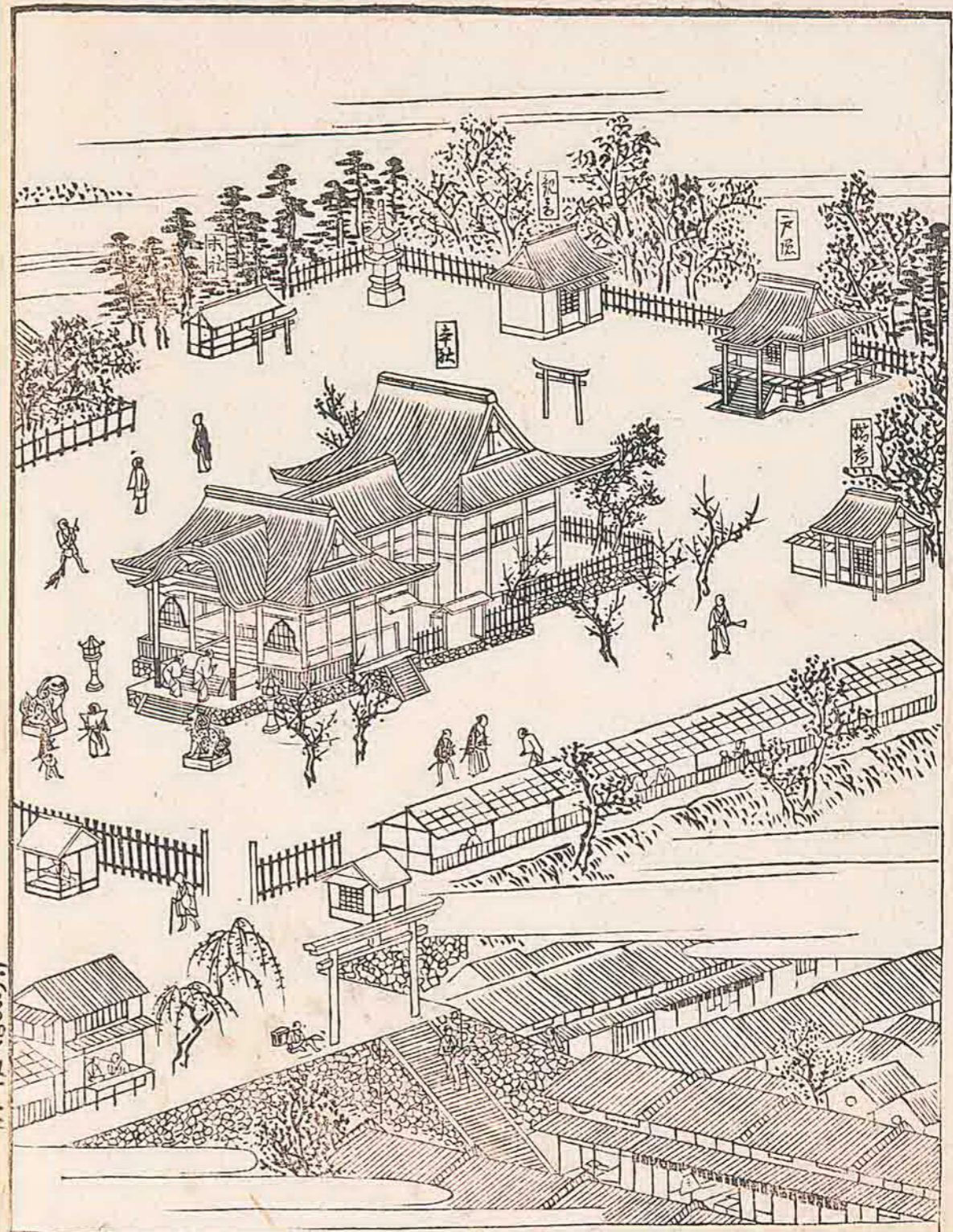
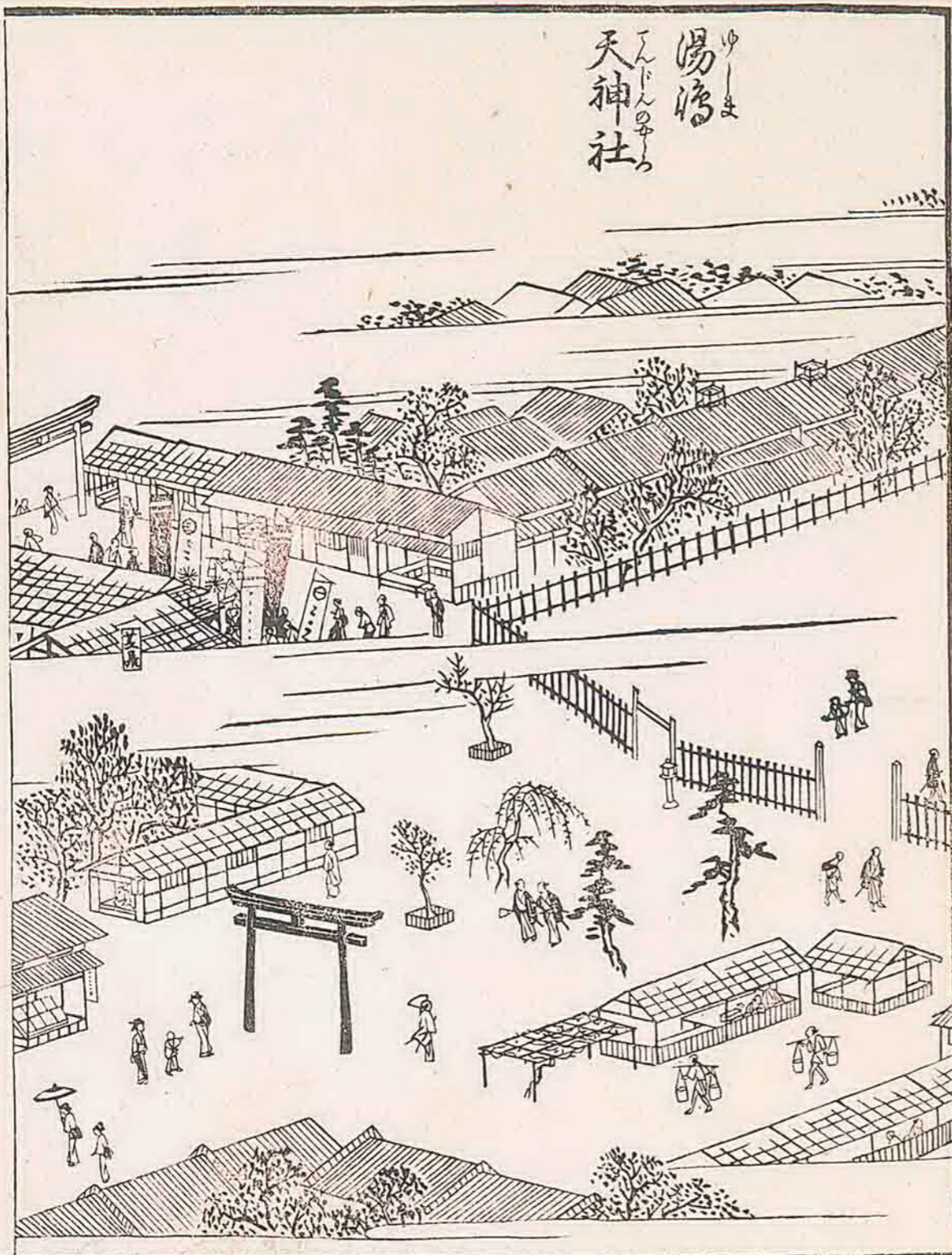
武 上尾

大宮まで二里八町 け歌より川越道岩付道日光道あり左の
方より淡間御所あり此方より橋方御所あり梶村を過て賀茂村
あり

武 大宮

浦和まで一里十町 宿の入り
東光寺とつと禪刹あり
氷川神社 大宮の御所あり 延喜式云 延喜郡 氷川神社名神大月次
新嘗武蔵國一宮と稱す
祭神 素盞烏尊 け所の生土神
女躰社 幸社のたよりあり
五山社 大宮の御所あり 中山社 麓山社 正勝山社
金山社 手摩乳 足摩乳の余松
氷川王子社 神池の傍あり
末社 住吉社 布留社 神明宮
神樂殿 池の東にあり 幸地堂 池の西にあり
不動堂 月所あり
支當社と高野の二之宮あり 社頭廣く神前の池あり 橋あり

ゆしま
天神社
てんじんのかみ



申小辨敷天を安に神は森然として並樹の松原一帯を十八
町其中に神主山岩井角井等居住一社領三百石例祭は六月十
五日申川の邊國の大社ありて消人陰晴を嫌はば不絶の事あり
氷川社を以て府を不ましく是れどもみか邊社を勧修の神なりとぞ
まじりたる也

大宮原 野原の間に三十町許あり中程より邊の葉茂ありこれ松原に因りて
甲斐武蔵に於て神田老上列伊香保
なりやあざかり不見えくあり

夏も霧多き士り溪間も鼻乃さ兒 馬明

針ヶ村 右の合村ありは所よりを不晴する所也

蕨中の一里半ひが北は小月溪宮又楢の角あり
空晴るると此をこよ上とも溪間山見ゆ

調神社 浦和の南にありはあり是表式内也
焼米飯 餅をこむく小焼米と袋よこ

蕨

中江米や麻きく人小も也 半残
浦和はきく岩むとと白もこの村をむ村通りは其越也
樽見の中流ありわびむ村はきく蕨の都也
板橋中へ二里八町は驛民居六七所あり旅り
戸田川の二十四町あり

名を因むはワビさくせ里女う那 吉根 秀曉

け驛をすれとえりて飛の野系はけり戸田村ありて川端方
子安の釋迦の坊を所道あり

戸田川 川上を入間川と

此河をこく志村より所より少くは坂あり降りて小葉流有
又北流坂をさへてあ川沢村清水村ありて蓮沼むら

藤吉楢荷の角一海ありて又小坂坂ありて楢切坂より板橋の
驛あり

武板橋

江戸日本橋より二里はなれ申仙道の東橋より十町許あり
所々小瓦懸店あり形々紅粉を懸け花替はうはなぬ
美艶をわがる格子のうらゆれは旅客の歩とて先くあれを
板と真なるも多し

預部

思ひこもりもろやたれはむむ川上は流と玉章

頼政

平塚明神社

板橋の異の方平塚山あり
別当安樂院城官寺と号し

系神

八幡を即義家賀茂次郎義綱頼朝三郎義光の三霊を
祭つて三社とす

禮塚

平社の後山あり義家の禮を
祀りて三社とす

王子社

王子村あり別当と
東光院金輪寺とす

祭神

熊野三所神

寛永十一年 官家村の津造を林道春共記を書け
十三日寺中十二坊踊をぬ

本居四六十一

稲荷社

日村あり

飛鳥山

珠生の頂と雲と見え雲と散る花は秘も神をえさるぬ
白ひふ露れ夜ぬれに於て家為成るを多し

垂風花籠

風をたふ動ぬ雲と見え花の香るるその盛と 蘇島

富士権現

駒込あり富士社あり幸郷あり寛永年中は池よ

神明社

別当南松山あり
文治五年源頼朝公の深創し其後荒廢し小綱のそ育しと

田細八幡宮

別当白龍山東覺寺
文治五年源頼朝公の深創し其後荒廢し小綱のそ育しと

根津社

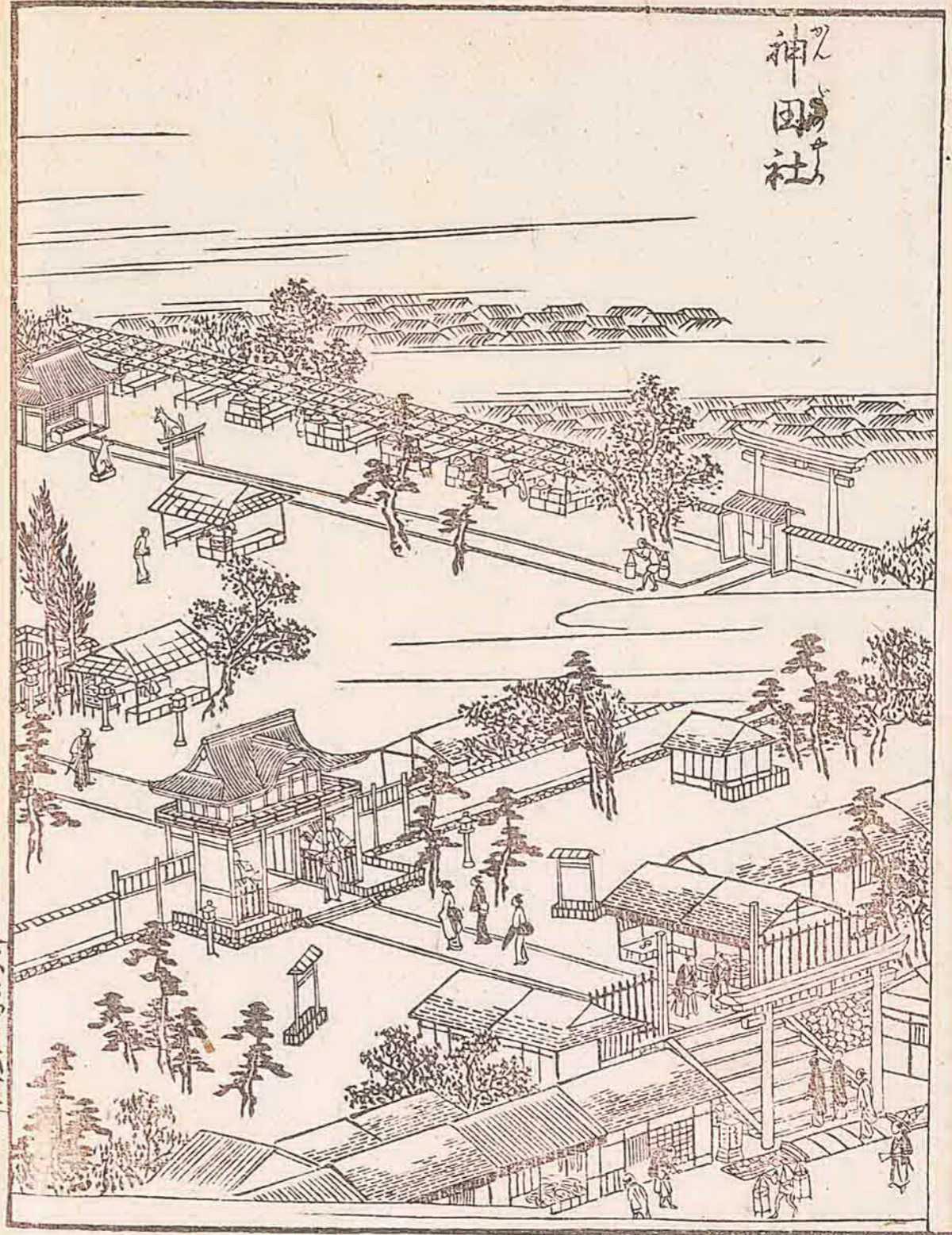
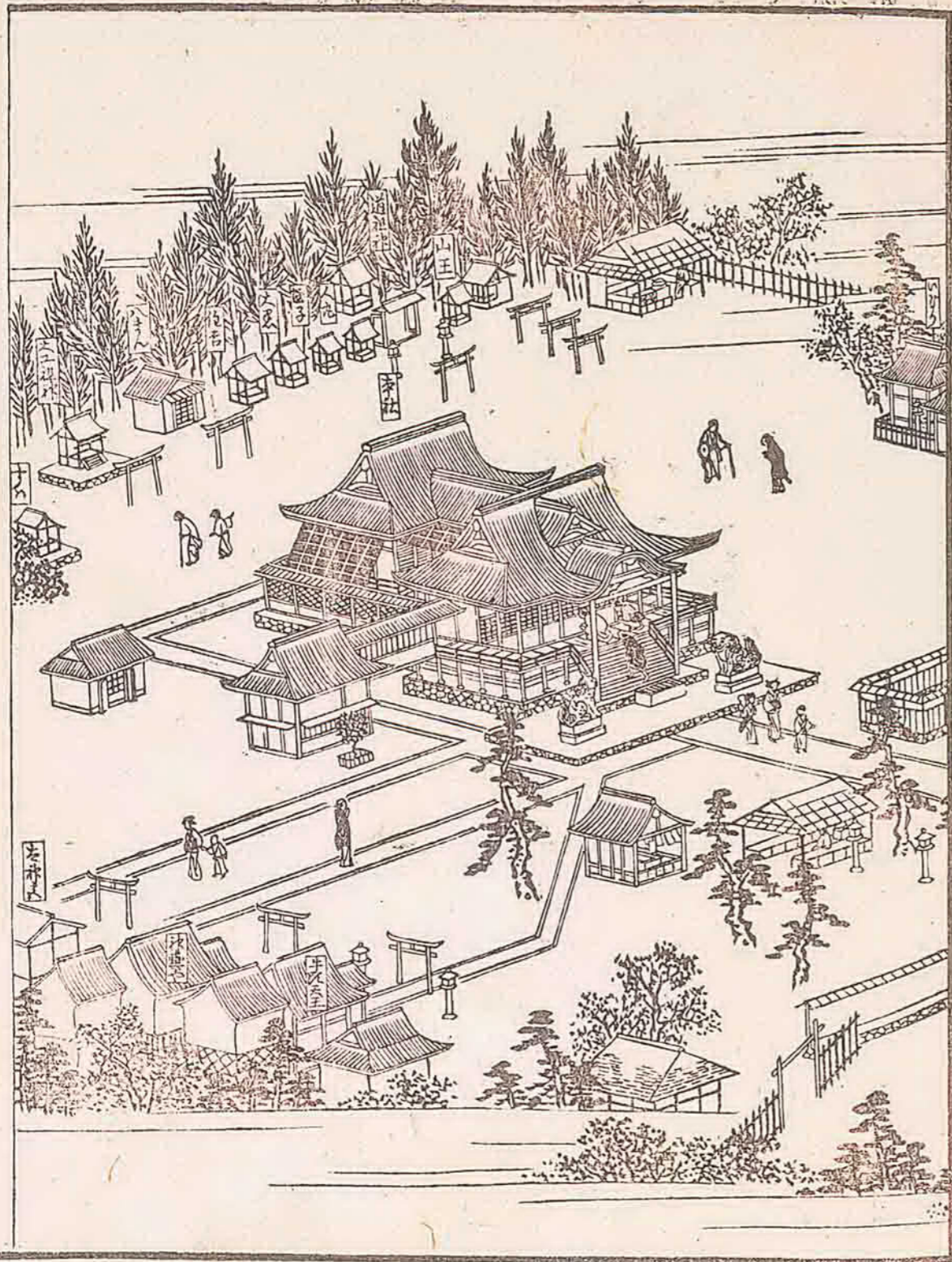
別当昌泉院
は宮も駒込神明宮と同時小頼朝の執事也

系神

素盞尊大己貴命 蛭子命 三所系

系神

素盞尊大己貴命 蛭子命 三所系



當社と今の社より東の方... 年申造立ありて其祭の極月六日... 社遷文ありて其祭の極月六日... 祭九月廿一日

湯瀉

天満宮 湯瀉あり

別當北野山喜見院

系神 菅公 文明十年 菅田道隆 草創に 祭日二月十日 十月十日あり

戸隠明神 祭日二月十日 十月十日あり

笹塚稻荷社 社領あり

妻意稻荷社 湯瀉あり

系神 日本武尊 橘姫 倉稻魂神 三度公 紀伊

日本武尊 系神 日本武尊 橘姫 倉稻魂神 三度公 紀伊

神田社 湯瀉あり

系神 大己貴命 湯瀉あり

村の靈を祀りし神田社 湯瀉あり

意終なり今も系神の時に神興志をいかに祈ふあり

新幣ありとて元和二年 湯瀉あり

牛頭天王三前 湯瀉あり

住吉明神 湯瀉あり

人丸明神 湯瀉あり

末社 湯瀉あり

聖堂 湯瀉あり

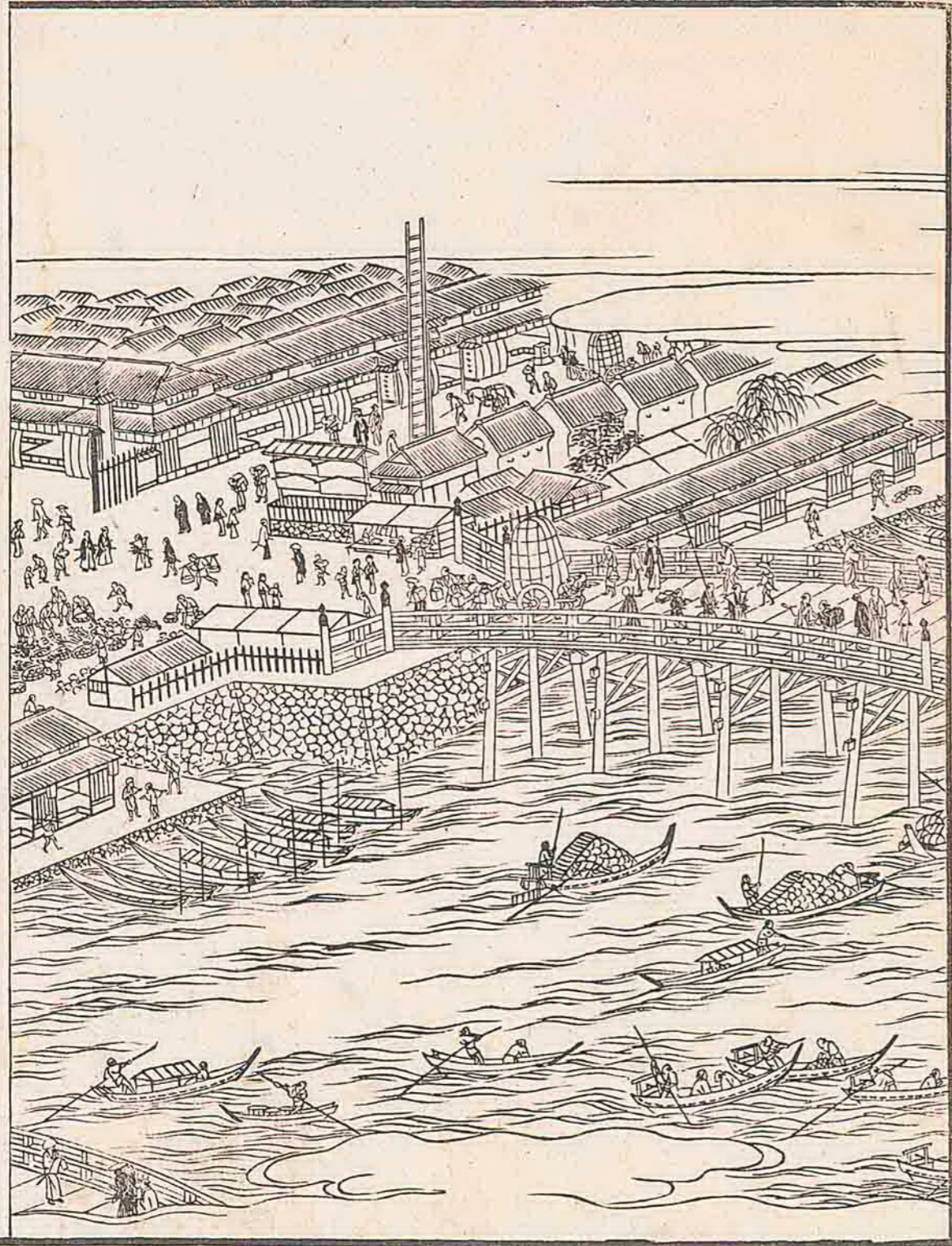
文宣王 湯瀉あり

行々其後 光仁天皇寶龜三年 湯瀉あり

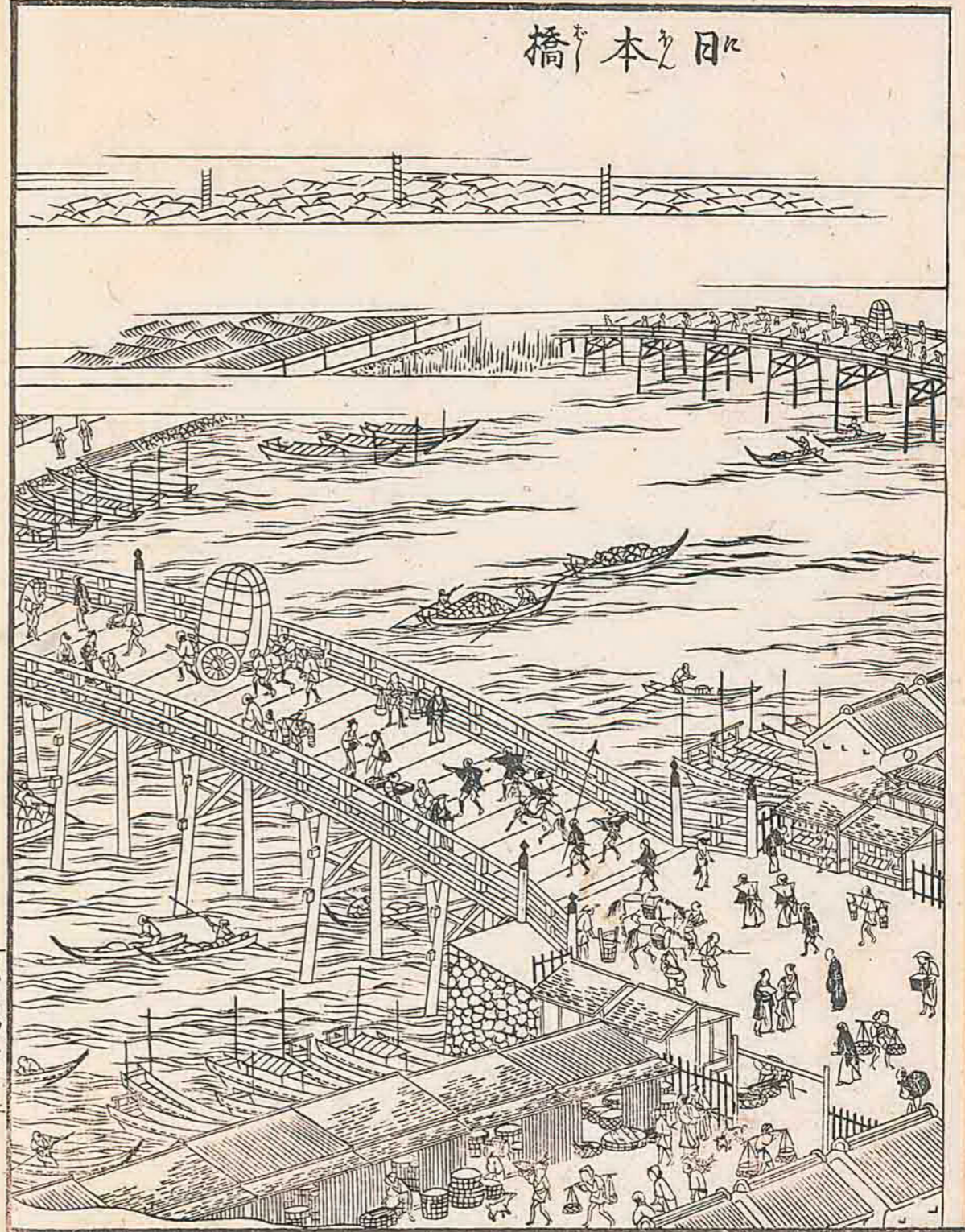
本朝釈奠の式と享日未明五列 湯瀉あり

て先聖の神座 湯瀉あり

先聖の神座 湯瀉あり



橋本之日



日本橋

432
序
175

本
卷
四
下
五
五

